第二章　縄文時代

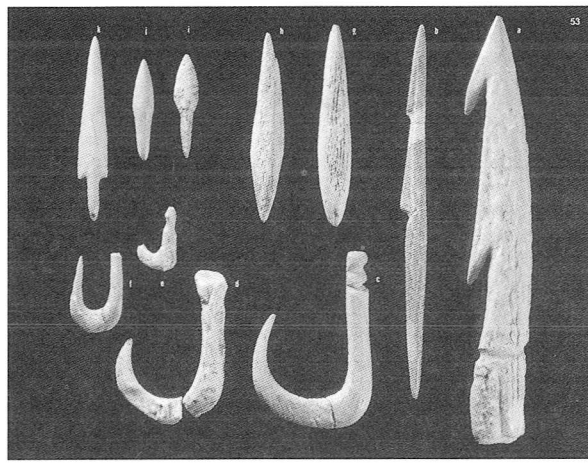
第一節　縄文時代の概観

縄文時代は日本列島に土器が出現してから、稲作を特色とする弥生文化が誕生するまでの約一万年間にわたる新石器文化である。縄文時代は通常、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分されている。縄文時代は長い寒冷な氷河期が終り、気候の温暖化とともに、氷河がとけて海面が上昇し、日本は大陸から離れて列島を形成した。また、動植物相もほぼ現在と同様の自然環境が形成された。

土器と弓矢

縄文時代人の生業は狩猟・漁撈・採集を基本とし、農耕・牧畜をともなわない特異な新石器文化である。縄文時代を特色づけるのは土器と弓矢の使用が始まったことである。土器の発明はものを煮炊きすることで可食範囲を拡げるとともに、食料の貯蔵などをも可能にし生活の安定に役立った。土器には縄目文様が多く用いられたことから縄文土器と名付けられ、時代の名称ともなった。狩猟では旧石器時代の槍に代って弓矢が用いられるようになった。これは氷河期の大型動物が姿を消し、シカ・イノシシといった敏捷な中型獣に対する狩猟としてはより効率的方法であった。

縄文時代の石器には、根茎類の採取などに用いられたと考えられる多量の打製石斧、樹木伐採用の磨製石斧、木の実などを磨り潰す石皿や磨石、漁撈用のおもりと考えられる石錘（せきすい）など各種の機能に対応する器種が発達した。ほかに、



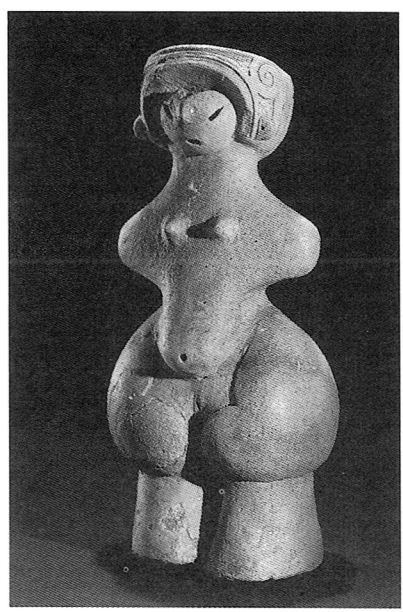
図Ⅰ-8　骨角製漁撈具（千葉県加曾利貝塚出土）
右端．長さ14.8 cm『古代史復元』2より

貝塚遺跡からは、釣針・銛（もり）・ヤスなど骨角製の漁撈具も多く発見されている。縄文時代人はこうした道具を用い、季節の変化に適応しながら、自然と一体となった生活を営んでいたと思われる。

縄文人の住居は、陽当りがよく、水場に近い台地上に直径五メートル前後の竪穴住居を営み、数名の家族を単位として生活していた。また、竪穴住居が何軒か集まって集落を形成した。集落は中央の広場を囲んで環状・馬蹄形状に構成される場合も多かった。縄文中期の集落には、中央の墓域を囲んで直径一〇〇メートルを超える大規模な環状集落もみられる。こうしたことは、縄文人の社会が規律と秩序を有する強固な共同体規制を保持していたことを示している。

一方、縄文人の住居は規模や構造がほぼ同じであること、埋葬も共同墓地におこなわれて副葬品などがみられないことなどから、貧富や階級差のない社会であったことがうかがわれる。しかし、自然物採集経済に基礎をおく縄文人の生活は、気候の変化などの自然的条件に左右されることも多かったと考えられる。そうした中で、人々は呪術（じゅじゅつ）によって豊かな自然の恵みを願い、災悪を除こうと考えた。女性を形どった土偶、男性を象徴する石棒などをはじめ、日常生活の広範囲に呪術の支配した社会でもあった。

日本人の祖先縄文人　明治一〇年（一八七七）E・S・モースによる大森貝塚発掘を機に、日本の考古学研究が本格的に開始された。この発掘で彼は人骨約二〇点（頭蓋骨・四肢骨断片）を発見しているが、以来、縄文人をめぐる人種論が盛んになり、縄文人アイヌ説、コロボックル説のような人種交代説や混血説など諸説が唱えられた。こうした背景には、縄文人と現代日本人との間ではかなり異った身体的特徴があることに由来する。モースの発掘以来一〇〇余年、縄文人骨の発見例も全国で約一万例に近いものと推定されている。加えて、縄文人と現代日本人の中間に位置する弥生時代人、古墳時代人の研究も進み、縄文人の実態が次第に明らかになりつつある。



図Ⅰ-9　土偶（長野県茅野市出土）
高さ 27 cm

最近の人類学的研究では、こうした成果の上に立ち、縄文人が現代日本人の直接的祖先であるとする考え方が支配的となっている。埴原和郎（はにはら）は「縄文人はその身体的形質からみて、日本人の基盤となった集団であることは間違いない。かつて人種交代説でいわれたように、縄文人と現代日本人とのあいだにはたしかに大きな形態の差があるが、これは大局的にみて、同じ集団の時代的変化（小進化）とみることができる。」（『日本人誕生』）とし、現代日本人の基層集団は縄文人であるとしている。

しかし、ひと口に縄文人といっても時期、地域によって差があることも事実で、人骨の発見例も中期以降のものが

圧倒的に多い。ここでは縄文人の一般的特徴について述べておこう。縄文人の頭蓋骨は長さや幅が広く、外見上は大頭で、顔は幅広であるが高さは低い。眉間と鼻骨が強く隆起し、鼻筋はよくとおっている。顎は張り出し、いわゆるエラの張った頑丈な感じを受ける。歯は現代人のように、上の歯が下の歯にかぶる鋏状咬合ではなく、上下の歯が毛抜き状に咬み合う鉗子状咬合を呈する。ムシ歯は少なく、磨耗がいちじるしい。身長は一般的に低く、男性の平均が一五八センチメートル、女性が一四八センチメートル、四肢骨は一般的に頑丈である。

図Ⅰ-10　縄文人

縄文時代には、右のような特徴をもった縄文人が、北は北海道から南は沖縄に至る日本全土に居住していた。しかし、その後九州から近畿地方を中心とする西日本では、弥生文化をもたらした大陸からの渡来人との混血により、形質変化を受けた。それに対し、北海道のアイヌ人や南西諸島の琉球人は、そうした影響を受けることが少なかったため、より純粋に縄文人的特徴が残されたと考えられている。

第二節　縄文文化の変遷と福生の遺跡

福生の遺跡

福生市内には、現在一八か所の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、縄文時代から中世に至るものを含むが、弥生時代や古墳時代に属する遺跡は明らかでない。したがって、遺跡の大部分は縄文時代に属するものである。これらの内、発掘によって様相の明確なものは長沢遺跡（4号遺跡）、不動尊遺跡（5号遺

図Ⅰ-11　福生市の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考
1		加美 3-32	縄文前・中・後	縄文土器，打斧，礫器	昭57年調査
2		福生 623	縄文	石棒（単独出土）	
3		福生 679 付近	縄文後，平安？	縄文土器，石錘，土師器，敷石住居址？	
4	長沢	福生 1071 付近	縄文前・中・後，近世	縄文土器，打斧，磨斧，石錘，石匙，石皿，凹石，土偶他	昭45, 46, 52, 55, 56, 57, 58, 59 年調査
5	福生不動尊	福生 2142 付近	縄文早・中・後，平安？	縄文土器，打斧，礫器，石錘，スタンプ形石器，磨石，土師器	昭 52, 60 年調査
6		牛浜 15 付近	縄文後，平安	縄文土器，打斧，石錘，土師器	昭 61 年調査
7		武蔵野台2-33付近	縄文中，平安	縄文土器，剝片，土師器	
8		武蔵野台 1-2 付近	縄文	石錘	
9		福生 2265 付近	縄文	石錘	
10		横田基地内	縄文	石錘	
11		福生 2322 付近	縄文早・中	縄文土器，石錘	
12		牛浜 162 付近	縄文	打斧	
13		熊川 1344 付近	縄文前・中，平安	縄文土器，打斧，礫器，剝片，土師器	昭 59 年調査
14		熊川 1688 付近	縄文，古墳	剝片，土師器	
15		熊川 232 付近	？	土師器	
16		熊川 79 付近	縄文中，古墳	縄文土器，土師器	
17		武蔵野台1-19付近	縄文	石錘	
18	長者堀？	熊川 616	中世	板碑	

表Ⅰ-1　福生市遺跡一覧表

跡）で、ほかに1号遺跡、6号遺跡、13号遺跡で小発掘が試みられ、ある程度遺跡の性格が明らかとなっている。

福生市は地形的に多摩川に向ってヒナ壇状をなす河岸段丘が発達している。最高位の立川段丘は福生駅東側を通る崖線上に広がり、厚いローム層で覆われている。以下、拝島段丘、天ケ瀬段丘、千ケ瀬段丘を経て多摩川の河原面へとつづく。なお、拝島段丘以下の低位段丘にはローム層の堆積はみられない。縄文時代遺跡の多くは、段丘崖の豊富な湧水を利用して、段丘縁辺部に形成されるものが多い。市内の縄文遺跡は早・前期の古い時期のものは上位の立川段丘上に、中期以降の遺跡は拝島段丘以下の低位段丘上に存在する。

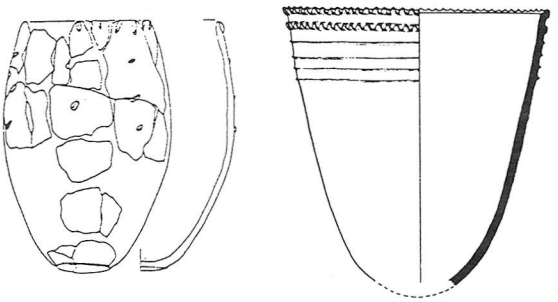
1　縄文草創期

最古の土器

最古の土器を求めての研究は戦前から注目されていたが、撚糸文土器がローム層直上から発見されたこともあって、最古式縄文土器の地

位を保っていた。しかし、昭和三〇年代から山形県日向洞穴、新潟県小瀬ケ沢洞穴、同室谷洞穴、長崎県福井洞穴などの調査で、より古式の土器が発見され、山内清男は従来の縄文早期を二分して草創期・早期とし、縄文時代六期区分法を提唱した。

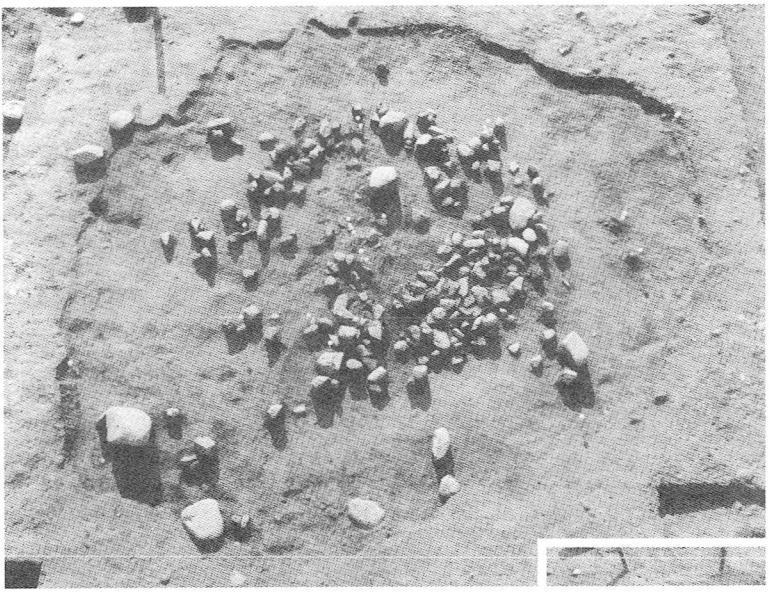
縄文草創期は約一万二〇〇〇年前から九〇〇〇年前で、環境的には後氷期の温暖化が急速に進み、海面の上昇は日本列島を形成し、植生も亜寒帯の針葉樹（トウヒ属、モミ属など）が急減し、落葉広葉樹の卓越へと変化した。小金井市野川中洲北遺跡では、旧石器時代から縄文草創期にかけて三つの泥炭層が発見され、多量の木材遺体が出土した。第Ⅲ泥炭層は一万二〇〇〇～三〇〇〇年前で、旧石器時代末から縄文草創期に比定される。ここではトネリコ属が半分（五四・三パーセント）を占め、ついでコナラ節（一一・九パーセント）、ハンノキ節（八・六パーセント）とつづき、温帯性の落葉広葉樹が優占していたことを示し、この地域での気候温暖化を具体的に示している。



図Ⅰ-12　縄文草創期の土器
左，豆粒文土器　右，隆線文土器

縄文草創期の土器は、洞穴遺跡などの層位的事実から、隆起線文→爪形文→押圧縄文→回転縄文の変遷が想定されているが、近年、旧石器時代終末の石器群と伴出する無文土器の存在が注目されている。

隆起線文土器は長崎県福井洞穴から細石器とともに発見されたことから最古の土器とされ、隆線の種類によって隆起線文→細隆起線文→微隆起線文という変遷が認められている。また、長崎県泉福寺洞穴出土の豆粒文土器はさらに古いもの



図Ⅰ-13　縄文草創期の住居址（秋川市前田耕地遺跡）『季刊考古学』4より

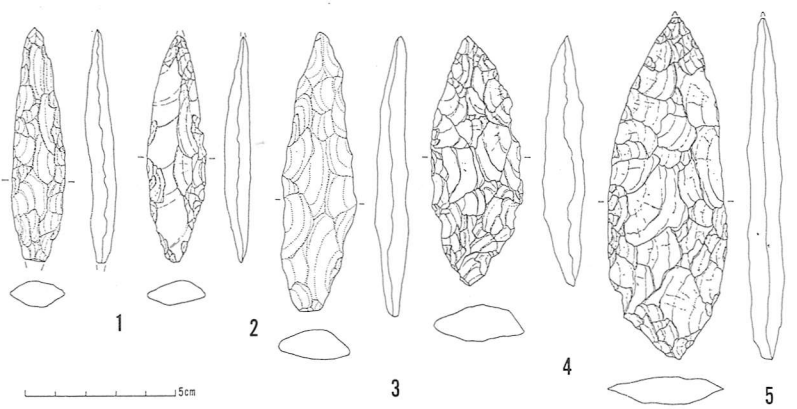
との認識がある。爪形文土器は半截した篠竹や爪先で三日月状の爪形文を連続させたもので、中には隆起線文と爪形文が併用された土器などもみられる。押圧縄文は縄文土器の特徴である縄の初源として注目されるが、縄の押し付け方にバラエティがあり、やがて縄を土器面に回転施文する回転縄文へと発展していく。

多摩の草創期遺跡とサケ　縄文草創期の遺跡は福生市域ではまだ確認されていない。多摩川流域では前述の小金井市野川中洲北遺跡から約一二〇点の草創期土器片が出土し、隆起線文土器、爪形文土器と押圧縄文系の絡条体圧痕文や無文土器が含まれていた。隆起線文土器は小金井市前原遺跡、同西之台遺跡にもあり、野川流域に比較的顕著な存在である。また、多摩ニュータウン遺跡群や町田市なすな原遺跡からも隆起線文土器が出土している。

縄文草創期の遺跡として注目されるのは秋川市前田耕地遺跡である。平井川と秋川に挟まれ、五日市線東秋留

駅南東に位置するこの遺跡は、団地建設に先立って事前調査が実施された。その結果、縄文時代から平安時代にわたる遺構が発見されたが、中でも縄文草創期の住居址二軒と多量の石器群は特筆される。住居址は八個の礫を弧状にめぐらしたものと、径四・二メートル×三・一メートルの不整円形の竪穴住居址とである。後者の竪穴は確認された掘り込みは一〇センチメートル程度と浅いが、床面を掘り窪めた炉の存在は注目される。出土遺物の中では槍先形の尖頭器が多数を占め、ほかに黄灰色の無文土器が出土している。土器は草創期の無文土器に含まれ、茨城県勝田市後野（うしろの）遺跡の土器などとも関連あるものと思われる。さらに重要な発見は、竪穴内からサケの顎歯七二〇〇点が検出されたことである。これは体長一メートル前後のサケ七〇～八〇匹分に相当し、約一万年前、多摩川上流域もサケの溯上圏で、縄文人は秋に産卵のため川を上ってくるサケを捕え、食料としていたことを如実に示したものといえよう。

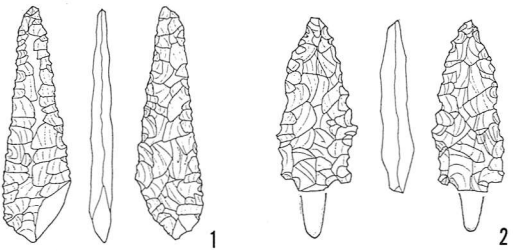
山内清男は縄文遺跡が関東から東北地方に多いことから、縄文文化をサケ・マス文化と規定した。しかし、遺跡からこれらの骨が出土する例は非常に少なく、疑問視する向きもあったが、着眼の正確さが証明されたといえよう。



図Ⅰ-14　縄文草創期の槍先形尖頭器（秋川市前田耕地遺跡出土）

前田耕地遺跡からは一〇〇〇点を超える尖頭器が出土しており、しかもその九割以上が欠損したり、製作途上で遺棄されていること、石器製作の際の剝片や砕片が多量に残されていることなどから、ここは石器製作址であったことが考えられている。

槍から弓矢へ　福生市域で縄文草創期に関連あると思われる遺物は、小野茂時の採集した石器中の有茎（舌）尖頭器二点である。図Ⅰ-15-1は先端と基部をわずかに欠損する。現存長四・六センチメートル、安山岩製で両面加工の細身の製作である。2は基部を欠損するが、比較的幅広の鋸歯状側辺部と、三角状の先端部をもつチャート製で、現存長三・五センチメートルを測る。これらの石器がどこで採集されたのか正確なことはわからない。しかし、小野茂時によれば、ほかの七七点の石鏃とともに、大部分は市内武蔵野台一、二丁目の福生市北部の第一段丘上で採集したものという。同様の例は井上九万兵や佐藤正一の採集した石鏃についてもいえ、現在の横田基地内や八高線東福生駅周辺に石器散布地があったようである。



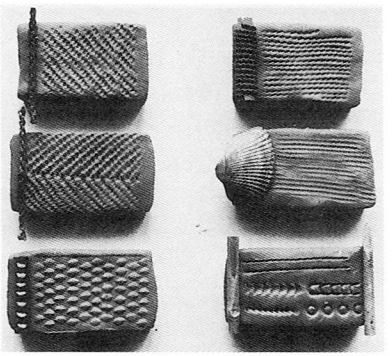
図Ⅰ-15　福生市内採集の有茎尖頭器

狩猟具の槍先形尖頭器が石鏃に変化するのは縄文時代の大きな特徴である。それは正に旧石器時代から縄文時代への変化を象徴している。石槍は概して大形で、棒に結え付けて突き槍とし、獲物に立ち向ったものである。それに対し、石鏃は矢の先端に装着されて弓で射られた。シカ、イノシシのような敏捷な動物に対しては効果的な飛び道具である。石槍と石鏃の中間に位置するのが有茎尖頭器で、大きさや重量も両者のほぼ中間を占めている。有茎尖頭器は投げ槍として用いられたと思われ、縄文草創期を特徴づけ

る石器の一つである。突き槍から投げ槍へ、そして弓矢への狩猟技術の変化は、市北部の第一段丘上で活動した人々によって展開されたと思われる。

2　縄文早期

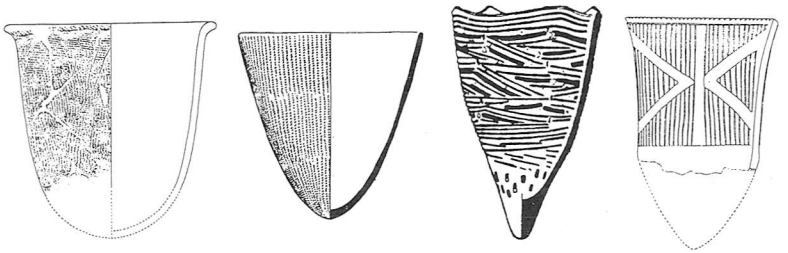
撚糸文文化の遺跡　縄文早期は約九〇〇〇年前から六〇〇〇年前と推定されている。気候の温暖化は一段と進み、関東以西の低地にはコナラを中心とする暖温帯落葉広葉樹林が拡大し、早期後半には優温期を迎え、海面上昇は一段と進んだ。縄文文化を特徴づける漁撈活動も活発化し、神奈川県横須賀市の夏島貝塚をはじめ、沿岸部には多くの貝塚が遺されている。



図Ⅰ-16　土器文様のつけ方
左上より，縄文，羽状縄文，押型文
右上より，撚糸文，条痕文，竹管文

土器は縄文土器の名にふさわしく、縄目文様が発展し、撚り紐を土器面に回転してつけた縄文、撚り紐を軸にコイル状に巻きつけて回転した撚糸文などの土器が盛行した。また、早期後半にはへら描きの沈線文やアナダラ属貝殻腹縁のギザギザで器面を引き掻いた貝殻条痕文の土器が流行した。器形は丸底の深鉢形から先の尖った尖底へ、そして早期末には平底の土器も登場した。また、条痕文土器の頃から、胎土に植物繊維を混入することも多くおこなわれるようになった。

早期は本市を含む多摩川流域で、縄文人の生活が本格的に展開されはじめた時期で、特に早期前半の撚糸文系土器を出土する遺跡が多く分布する。



図Ⅰ-17　縄文早期の土器
左から井草式（昭島市上川原遺跡出土）夏島式（神奈川県夏島貝塚出土）
田戸下層式（千葉県城ノ台貝塚出土）野島式（昭島市林ノ上遺跡出土）

近隣では青梅線拝島駅南約〇・五キロメートルに、かつて「拝島式土器」の標準遺跡とされた拝島林ノ上遺跡が、また、昭島駅南約〇・三キロメートルには上川原遺跡がある。これらはもっとも高い立川段丘の縁辺部にあり、共通の立地環境にある。立川市大和田遺跡や対岸の日野市神明上遺跡では、方形・長方形の竪穴住居址が発見され、定住的集落を形成していたことがわかる。さらに野川流域でも府中市武蔵台遺跡で撚糸文末期の集落が発見され、広場を囲むように弧状に配列した住居址群は、縄文集落の原型を示すものとして注目される。ほかに、小金井市はけうえ遺跡、三鷹市立第五中学校遺跡からも撚糸文期の集落が発見され、本地域での活発な縄文人の活動を証明している。

撚糸文期の人々は、土器のほかに多量の石器を残している。石器では礫器、スタンプ形石器、磨石の多いことが共通している。これらは木ノ実や根茎類など植物質食料の加工に使用されたものと考えられ、早期縄文人の生業の一端を示している。しかし、石鏃の出土も知られており、弓矢を用いた狩猟も勿論重要な生業であった。海岸に住んだこの時期の縄文人は貝塚を残しており、貝類の採捕とともに漁撈活動も営んでいたことがわかる。

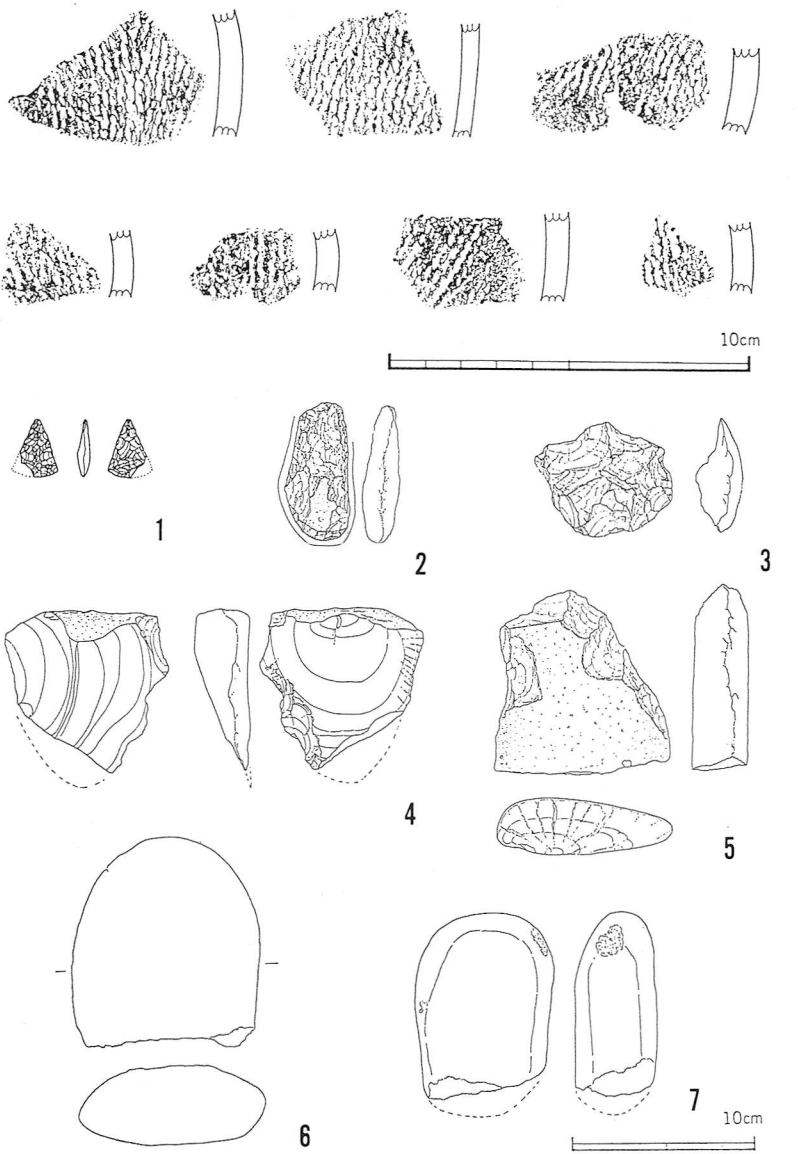
不動尊遺跡の撚糸文文化

福生市内の縄文早期遺跡としては不動尊遺跡がある。この遺跡は福生駅東〇・四キロメートル、標高一三六メートル、比高差約五

メートルの立川段丘上に位置している。発掘は昭和五二年(一九七)、不動尊移転にともなってC・T・キーリを調査団長として実施された。発掘面積は三八八平方メートルで、調査区域から三基の集石炉と縄文土器、石器などが発見された。集石炉は直径一メートル程度で、深さ五〇センチメートル前後のすり鉢状の穴に、拳(こぶし)大の焼礫が詰ったもので、縄文時代の特殊な調理跡とされているものである。集石炉は本地域では縄文早期と中期に盛行するもので、不動尊遺跡の2・3号集石炉のように、底面に敷石をもつものは早期にはみられない。また、2号集石内の木炭を放射性炭素による年代測定をおこなったところ5340±120 B.P.(一九五〇年を基準にそれ以前の年代を示す)という数字が得られ、この面からも縄文早期に属するとは考え難い。調査地点からは縄文中期の土器片も検出されていることから、集石炉はこの時期に属する可能性も高い。しかし、遺跡内に散在した約五〇〇〇点におよぶ焼礫分布は、撚糸文期の在り方と共通する面を有することも留意しておく必要がある。

土器は集石炉から離れて図Ⅰ-18に示した撚糸文土器が発見されている。いずれも小破片であるが、丸底の深鉢形と推定され、厚さ五～八ミリと薄手、胎土に砂を含んでやや粗く、茶褐色で焼成は良好である。文様は撚り紐を軸に巻いた原体を縦に回転施文した撚糸文で、撚糸の条間隔が密接したものが多く、縄文早期夏島式に比定される。

石器は剝片を含めて約五〇点あるが、確実に早期にともなうものかどうか不明である。1は黒曜石製の三角形石鏃、3・4は礫器で、礫を粗割りして刃部を作出した撚糸文期の特徴的石器である。5のスタンプ形石器は、扁平な自然礫の一端を切断し、周辺に加工を施したもので、ときに切断面がいちじるしく磨耗している場合があり、物を磨り潰したりする機能を持ったものと思われる。この種の石器は多摩川流域の撚糸文期に特徴的であり、小金井市はけうえ遺跡からは約四〇〇点におよぶスタンプ形石器が発見されている。6・7は磨石、ほかに石皿様の石器があるが、中



図Ⅰ-18　福生不動尊遺跡出土の遺物

上2段は夏島式土器　下段は石器類　1. 石鏃　2. 打製石斧
3・4. 礫器　5. スタンプ形石器　6・7. 磨石

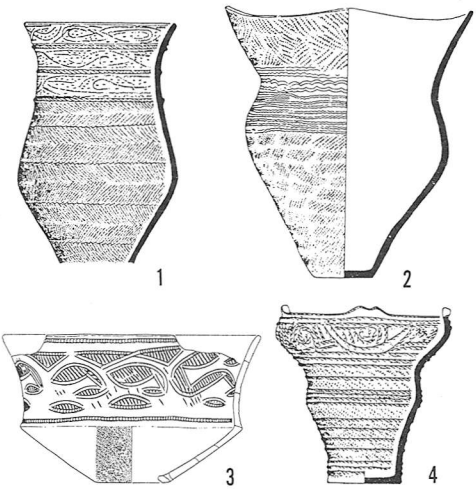
期の石皿のように中央が深く窪んでいない。以上の石器群は、縄文早期撚糸文期にともなった可能性が高い。不動尊遺跡は小規模ながら、福生市域での縄文人の活動を直接的に証明する最古の遺跡である。

なお、不動尊遺跡の調査では、土壌中の花粉分析をおこない、古環境の復元も試みられた。その中で、縄文早期の包含層に相当すると思われるⅡ層下部からⅣ層上部の試料は、コナラ亜科の花粉の割合が非常に高く、これらを主体とする落葉広葉樹林が優占し、加えてヒノキ科、イチイ科の針葉樹が混り、結論的に現在とあまり変らない古気候であったと推定されている。

3　縄文前期

縄文海進と集落発展　早期以来の気候温暖化は前期前半に頂点に達し、海面上昇によるいわゆる〝縄文海進〟により、関東低地では内陸深く海水の浸入がみられた。そのため、最奥部の貝塚として知られる栃木県下都賀郡藤岡町篠山の藤岡貝塚をはじめ、内陸部の溺谷の周辺には数多くの貝塚が残されている。しかし、比高差の比較的大きい多摩川流域では、海水の影響は下流域にとどまるが、それでも現在の海岸線から約一〇キロメートル上流、川崎市高津あたりまでマガキやハイガイなど海水産貝類を主体とする貝塚がみられる。

土器は前期前半の関山式では縄目文様が複雑化し、羽状縄文やループ状文などが発達した。早期以来の胎土に植物繊維を混入する手法は黒浜式までつづき、前期後半の諸磯（もろいそ）式では消滅する。諸磯式土器は深鉢のほか浅鉢や壺などの器形も加わり、機能分化がみられるとともに、口縁にイノシシなどの動物文を施した獣面把手なども登場する。文様は竹管や半截竹管による爪形文、細い粘土紐を貼り付けた浮線文など多様である。また、この頃から霞ケ浦周辺を中



図Ⅰ-19　縄文前期の土器
1. 花積下層式　2. 黒浜式　3・4. 諸磯式

心とする東部関東では、貝殻の腹縁をロッキングさせて文様とする浮島式が盛行した。土器文化圏の分化は縄文中期へと引き継がれ、勝坂・阿玉台文化圏へと発展していく。

集落としては、横浜市南堀貝塚で黒浜式期から諸磯式期の住居址五〇軒が発見され、中央に広場をもって環状に住居が配置する、縄文集落の基本型が確立した。また、長野県阿久(あきゅう)遺跡のように、直径一二〇メートルの巨大な配石遺構と二九軒の住居址発見や、福井県鳥浜貝塚のように、低湿地から豊富な木製品や漆工芸品などを出土した遺跡の発見で、縄文人の生活実態が物心両面から明らかになってきつつある。

多摩地域での縄文前期遺跡としては、八王子市椚田(くぬぎだ)遺跡で花積下層式期の長方形住居址が、町田市本町田遺跡からは諸磯式期の住居址五軒が発見されている。本市の近隣では拝島橋南の滝山丘陵上の平遺跡や宇津木台遺跡で諸磯式期の住居址や遺物が、秋川市前田耕地遺跡や同市草花遺跡などからも前期の遺構・遺物が多く発見されている。

福生市13号遺跡　この遺跡は福生市立第一中学校東南の立川段丘縁辺に位置し、標高一二七メートル、崖下との比高差四～六メートルを測る。遺跡の発見は昭和四五年で、その後、C・T・キーリによる遺物採集、昭和五九年の確認調査、平成元年の開発にともなう事前調査などがある。

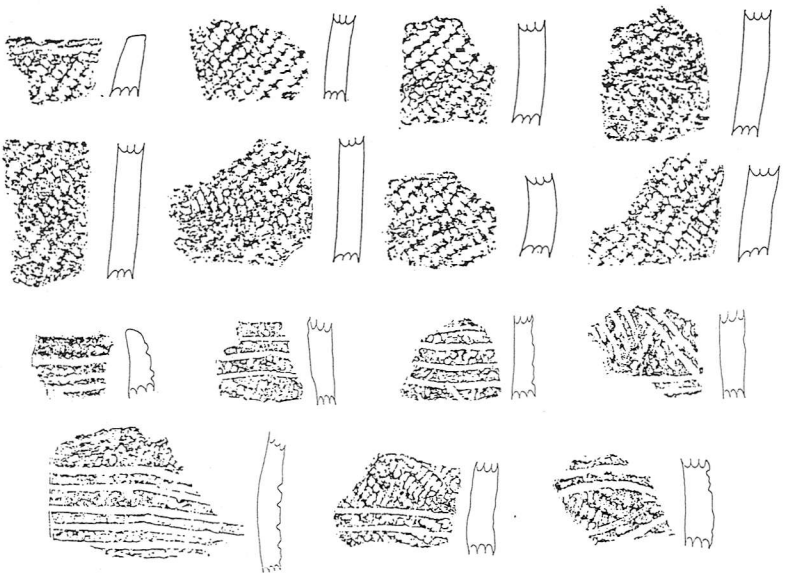
図Ⅰ-20　福生市13号遺跡の諸磯式土器

遺跡は南北約二五〇メートルの広範囲におよぶが、縄文前期遺物が散布するのは主に北西側で、南寄りからは時期的に若干新しいと思われる集石土坑一基が発見されている。調査範囲が狭いこともあって、これまで前期に相当する遺構は発見されていない。

遺物はC・T・キーリによって諸磯式土器片約五〇点が採集されているのと、確認調査の際出土した土器片、打製石斧、破砕礫などがある。土器はC・T・キーリ採集品は地文に縄文をもち、半截竹管平行線文を配した諸磯b式的なものが多いが、確認調査で出土したものは若干新しく、諸磯c式の範疇に含まれるものが多い。図Ⅰ-201は外反する口縁部で、口縁に刻み目文、頸部には横位の平行線文が施されている。2も半截竹管平行線が綾杉状に、3も無文地に半截竹管平行線文が交差して施されている。4はカマボコ状断面の平行線にボタン状貼付文をもち、諸磯c式の典型である。ほかに、縄文の土器や底部の破片がある。

石器では打製石斧欠損品二点、礫器かと思われる周縁に粗い剝離をもつもののほか、確認調査時に人為的に打ち割られた様相を呈する礫二十数点が検出された。これらは石器ではないが、石器製作工程での剝片なども含まれているものと思われ、今後の研究にまちたい。

福生市13号遺跡は、単なる遺物散布地ではなく、諸磯b式期～c式期にかけて



図Ⅰ-21　長沢遺跡の縄文前期土器（上2段黒浜式　下2段諸磯式）

の集落遺跡の可能性が高い。諸磯式期の集落は多摩地域では丘陵上に多く、多摩川左岸の台地上では明らかでない。その意味でも福生市13号遺跡の存在は貴重であり、本格的調査が望まれる。

長沢遺跡の前期土器　長沢遺跡は縄文中期の集落遺跡であるが、第四次と第七次調査で若干の縄文前期土器が発見された。第四次調査では、約二〇点の同一個体と思われる土器片が、一か所からまとまって出土した。小破片でおたがいに接合はしないが、器形は口の開く深鉢形と推定され、胎土に繊維を含み、色調は黄褐色～黒褐色で一定しない。文様は全面に斜縄文が施され、黒浜式に比定されるものと考えられる。

第七次調査では、同一個体と思われる諸磯b式土器八点が発見された。口縁のやや内湾曲する深鉢で、胎土に砂を含み、焼成の良好な土器である。色調は茶褐色で、文様は地文に縄文を用い、その上から半截竹管平行線文を施している。

長沢遺跡での前期土器は、いずれも遺跡の南寄り、福生市立第一小学校校地内から出土している。そして、同一個体が一地点に集中して発見されるというあり方は、日常的な居住の場と解するよりは、狩猟・採集活動などの一時的生活領域に残されたものと理解できよう。先の13号遺跡での在り方と考えあわせるならば、縄文前期の居住地域は依然として早期以来の立川段丘上にあり、拝島段丘上に集落が営まれるのは縄文中期以降と見なされる。

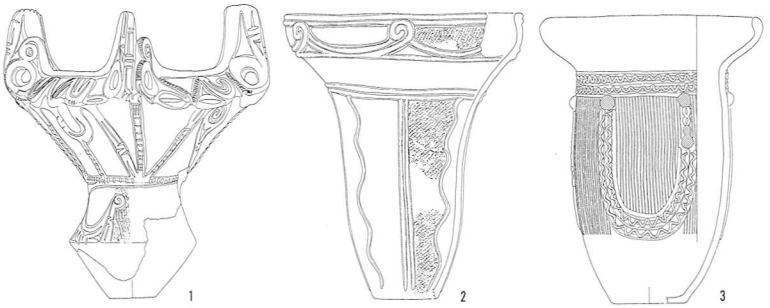
4　縄文中期

華麗な勝坂式土器

約五〇〇〇年前から四〇〇〇年前に相当し、東日本での縄文文化がもっとも高揚した時期である。中部山岳から関東にかけては多くの大集落が形成され、海浜地域には大規模な貝塚遺跡が残されている。気候は前期後半から中期中頃までは、現在とあまり変らない温暖な気候であったが、中期末から後期にかけて寒冷化した。この変化は植生や動物相にも影響を与え、中部山岳から西部関東に至る中期集落は急速に減少していく。多摩川流域の中期集落も、大半が中期末をもって終焉する。

土器は中期前半には大きな把手や繁縟な曲線の貼付文を有する勝坂式土器が、中部地方から関東地方にかけて盛行する。同じ頃、霞ケ浦を中心とする東部関東では、胎土に雲母を含んだ特徴的土器、阿玉台式が発展した。中期後半は、渦巻文を主文様とする加曾利E式に統合され、斉一性の強い土器が席捲する。勝坂式は文様の複雑化とともに、

図Ⅰ-22　有孔鍔付土器



図Ⅰ-23　縄文中期の土器（1. 勝坂式　2. 加曾利E式　3. 曾利式）

把手に人面を付けた顔面把手付土器、蛇身を表現した文様、灯明具と推定される釣手形土器、太鼓説や醸造具説のある有孔鍔付土器、器台形土器など特殊な用途のものが製作され、生活発展にともなう機能分化が看取される。

精神生活をうかがわせる遺物として土偶も多く出土する。山梨県釈迦堂遺跡の一〇〇〇点におよぶのは例外的であるが、八王子市神谷原遺跡の五三点をはじめ、各遺跡からの出土が知られる。土偶は妊婦を形どったものが多いことから、出産の無事を祈願したものと考えられるが、同時に自然の恵みの豊穣を願ったものと考えられている。また、男性を象徴する巨大な石棒もこの時期に出現する。

住居は直径五メートル程度の円形竪穴で、数本の柱で支えられた上屋をもっている。床面中央の炉は家族団欒の中心で、土器を埋設した埋甕炉、細長い石で四角に囲んだ石囲い炉、両者をあわせた石囲い埋甕炉などがある。また、中期後半には、住居の出入口に土器を埋め込んだ埋甕の風習が盛んとなる。埋甕の中には幼児骨や胎盤を収納し、死んだ子供の再生や、子供の健やかな成長を願った呪術であるといわれている。集落の多くはこうした住居が数軒から一〇軒程度が同時に存在し、何世代にも亘って営まれた。そのため、結果的に数十軒から一〇〇軒を超える集落遺跡が各地に残されることとなった。一軒の住居に五、六人が居住したとすれば、二、三〇人から五〇人程度の集団が同時に生活していた計算にな

る。いわゆる大集落と呼ばれるものも、実態はこうした集落の累世的繰り返しといえる。

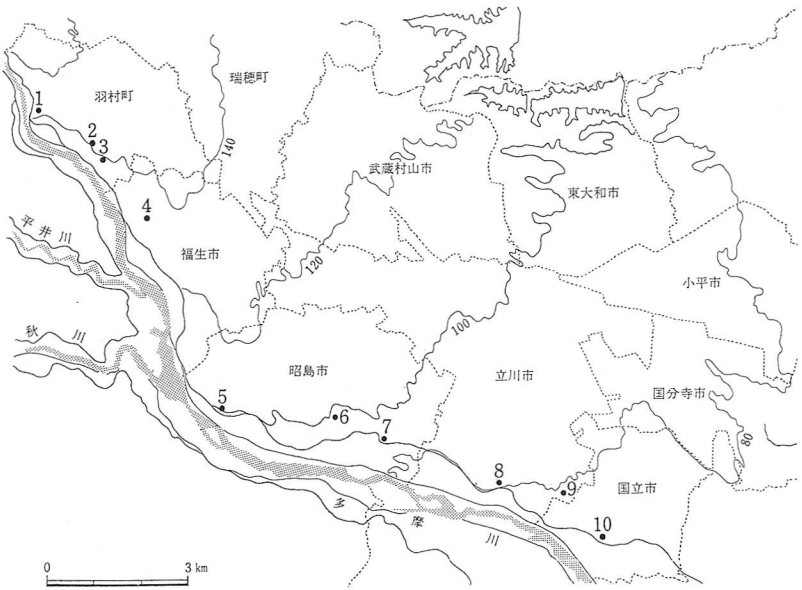
多摩川流域の集落発展

縄文中期の集落遺跡は、多摩川中流域では上流から羽村市精進バケ遺跡、同山根坂上遺跡、同羽ケ田上遺跡、福生市長沢遺跡、昭島市龍津寺東遺跡、同西上遺跡、同広福寺台遺跡、立川市大和田遺跡、同向郷遺跡、国立市南養寺遺跡など二～五キロメートル間隔で点在する。

精進バケ遺跡は多摩川に臨む天ケ瀬段丘上にあり、昭和六三年の調査で勝坂式期から加曾利E式期の住居址三九軒が発見された。ほかに、土坑、集石土坑多数が検出されたが、勝坂式期の住居址や土坑は主に南寄りに、加曾利E式期のものは北側に存在した。この遺跡は加曾利E式期中頃を最盛期とし、直径一〇〇メートル程度の環状集落であったと推定される。山根坂上遺跡は羽村駅の西約〇・三キロメートルの拝島段丘上にあり、これまでに約七〇軒におよぶ住居址が発見されている。加曾利E式期を主体とした、直径一二〇メートル程度の環状集落で、中央部に環状の配石遺構をともなっている。また、完形の釣手形土器三点が出土していることも注目される。羽ケ田上遺跡は山根坂上遺跡に隣接し、勝坂式期・加曾利E式期の住居址各一〇軒ほど検出され、隣接する遺跡の住居群は、時期的に相互に補完関係にあることが特徴である。

本市の長沢遺跡も勝坂・加曾利E式期の集落遺跡で、遺跡の南寄りに勝坂式期、北寄りに加曾利E式期の住居址が集中している。また、墓壙と推定される土壙が約二〇基発見されている。下流約四キロメートルには昭島市龍津寺東遺跡がある。縄文中期中頃から後期中頃に至る長期にわたる集落であるが、調査範囲が狭いため詳細は明らかでない。また、西上遺跡は青柳段丘上に立地し、ほぼ純粋に勝坂式期の集落として注目される。

立川市大和田遺跡は勝坂式期から加曾利E式期の集落で、青柳段丘上に占地する。向郷遺跡は矢川の源流部、立川

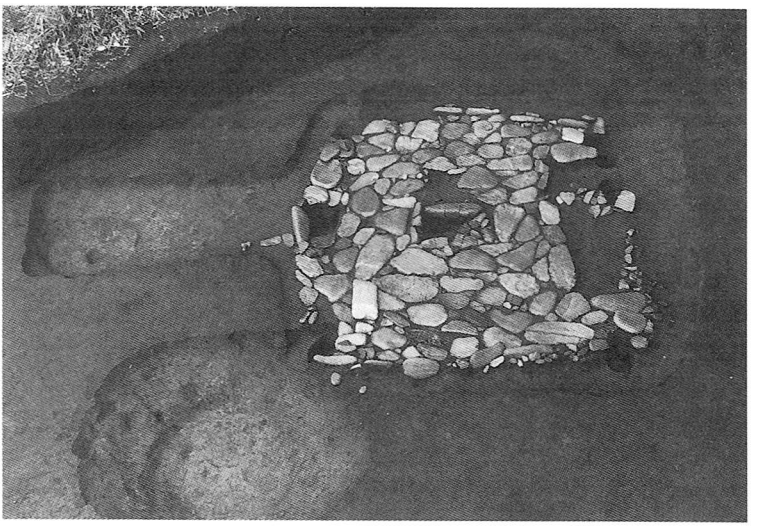


図Ⅰ-24　多摩川流域の縄文中期主要遺跡

1. 羽村市精進バケ遺跡　2. 羽村市山根坂上遺跡　3. 羽村市羽ケ田上遺跡　4. 福生市長沢遺跡　5. 昭島市龍津寺東遺跡　6. 昭島市西上遺跡　7. 昭島市広福寺台遺跡　8. 立川市大和田遺跡　9. 立川市向郷遺跡　10. 国立市南養寺遺跡

段丘の縁辺に位置し、最近の調査で住居址五〇軒と中央に約二〇〇基の墓壙をもつ、直径一二〇メートルの環状集落であることが判明した。向郷遺跡の主体は加曾利E式期であるが、東側に隣接して勝坂式期の住居址八軒が検出されている。国立市南養寺遺跡は青柳段丘上にあり、勝坂式期と加曾利E式期後半の竪穴住居址五六軒と、敷石住居址五軒が発見されている。この遺跡は加曾利E式期初頭に空白期があり、集落の一時的断絶がみられる。また、敷石住居の奥壁に大きな壺が据えられていたことや、復元された顔面把手付土器の出土などでも知られている。

右のように拠点的集落の密接したあり方は、多摩川左岸の中期縄文人が、比較的恵まれた資源環境のもとで、安定した生活を送っていたことを示している。それを支えたのはクリやドングリといった堅果類ではなかったろうか。多摩川に臨む台



図Ⅰ-25　南養寺遺跡（国立市）の敷石住居址

地の背後には広大な雑木林が拡がり、その豊かな恵みが多くの動物を育み、同時に縄文人の生活基盤を支えていたといえよう。

多摩川流域の縄文中期文化を特色づけるものに、多量の打製石斧がある。打製石斧は柄を着けて土掘り具とし、竪穴の掘削やユリ根・ヤマイモなど根茎類の採取などに使われたと思われ、多いところでは一遺跡から一〇〇〇点を超える出土をみることもある。また、磨石、石皿も多く、狩猟具の石鏃が意外と少ないことを考えると、中期縄文人の生活が、植物質食料に多く依存していたことを物語っている。

なお、中期末には住居の床面に平たい石を敷き詰めた敷石住居が登場するのも本地域の特色である。敷石住居は秋川市羽ヶ田遺跡、同草花遺跡、昭島市龍津寺東遺跡、立川市向郷遺跡、国立市南養寺遺跡などで発見され、後期初頭まで継続している。敷石住居をめぐっては、日常的住居か特殊な祭祀遺構なのか、その性格について議論されている。

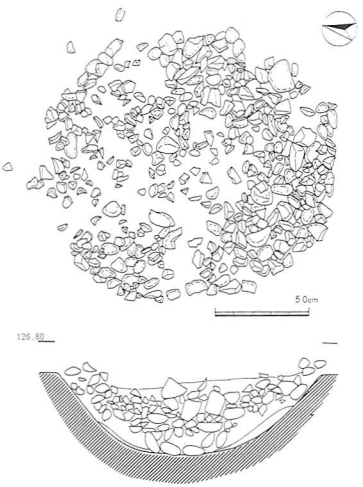
市内最大の長沢遺跡

福生市域の縄文中期集落は、前期までの立川段丘上から、一段下位の拝島段丘上に拠点を移し

た。長沢遺跡は福生市域で最大の規模をもつ遺跡で、これまで八次にわたる調査が実施されている。長沢遺跡は福生駅北西約三〇〇メートルを中心に、南北約四〇〇メートル、東西約二〇〇メートルの広大な面積を占めている。これまでの調査で、竪穴住居址二八軒のほか、集石土坑、墓壙など多数の遺構と、勝坂式期から加曾利E式期にかけての土器・石器が大量に発見されている。長沢遺跡の詳細については第三節に譲るが、多摩川流域の拠点的集落遺跡として重要な存在である。市内ではほかに、福生不動尊遺跡や13号遺跡からも縄文中期土器片が採集されており、これらの遺跡から発見された集石土坑もこの時期の所産と考えられている。しかし、これらの遺跡は土器片も少なく、定住的集落が営まれたとは考え難い。

13号遺跡の集石土坑は、遺跡の南端部から平成元年の調査で発見された。集石土坑とはすり鉢状の穴に焼礫が詰ったもので、石蒸し料理の跡と考えられている。13号遺跡の集石土坑は、直径一・四メートル、深さ五〇センチメートルの穴に、拳大の焼礫がびっしりと詰った状態で検出された。礫はテンバコ一〇箱分、大部分は被熱、赤化し、タール状の付着物の見られるものもある。また、穴の底面には扁平な大礫一三個が敷き詰められていた。13号遺跡の集石土坑は不動尊遺跡のそれとともに、遺構の構築面から考えて縄文中期の所産と推定される。

なお、13号遺跡の調査では土壌の花粉分析がおこなわれたが、当時の遺跡周辺の環境は、森林の伐採が進み、キク科の草本が卓越した草原と推定された。また、遺跡を取りまく林は、伐採後に



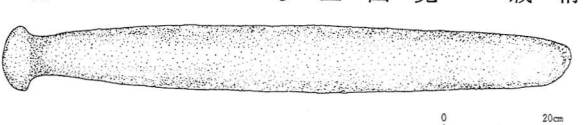
図Ⅰ-26　福生市13号遺跡の集石土坑

生育したと思われるコナラなどの落葉樹を中心に、二次林的要素の強い林とマツの仲間によって構成されていたようである。また、注目すべき点は、ソバ属の花粉がわずかに検出されたことで、栽培の可能性も考えられるが、今後の課題である。

2号遺跡は福生六三二番地付近で、ここからは江戸時代に多摩川上水開削中、巨大な石棒が発見された。石棒は内田満蔵家の小祀に御神体として奉られている。長さ一〇五センチメートル、断面がほぼ円形で縄文中期に典型的なものである。2号遺跡付近ではその後の調査にもかかわらず、土器などの遺物はまったく発見されていない。石棒のみの単独出土で、集落外での祭祀などに関係したものと考えられる。

5　縄文後期

不思議な衰退と呪術の発達　縄文中期に繁栄した中部地方から西部関東にかけての縄文社会は、後期に入って急激に遺跡数を減じ、衰退していく。一方、東部関東の海岸地域には大貝塚が形成され、活発な漁撈活動が展開されていたことを示している。内陸部での中期縄文社会の崩壊が、いかなる原因で生起したのかは明らかでない。ただ、縄文前期からの優温期は、中期後半から寒冷化したことが、泥炭層の植物遺存体などで明らかとなっている。寒冷化による植生の変化など、自然の恩恵の減少は、採集経済に基礎をおく縄文人の生活に、少なからぬ打撃を与えたであろうことは理解される。また、中期集落発展の中で、人口が飽和状態となり、拡大再生産の望めない社会状況の中で衰退したという意見もある。



図Ⅰ-27　福生市2号遺跡出土の石棒

図Ⅰ-28　土製仮面（埼玉県出土）

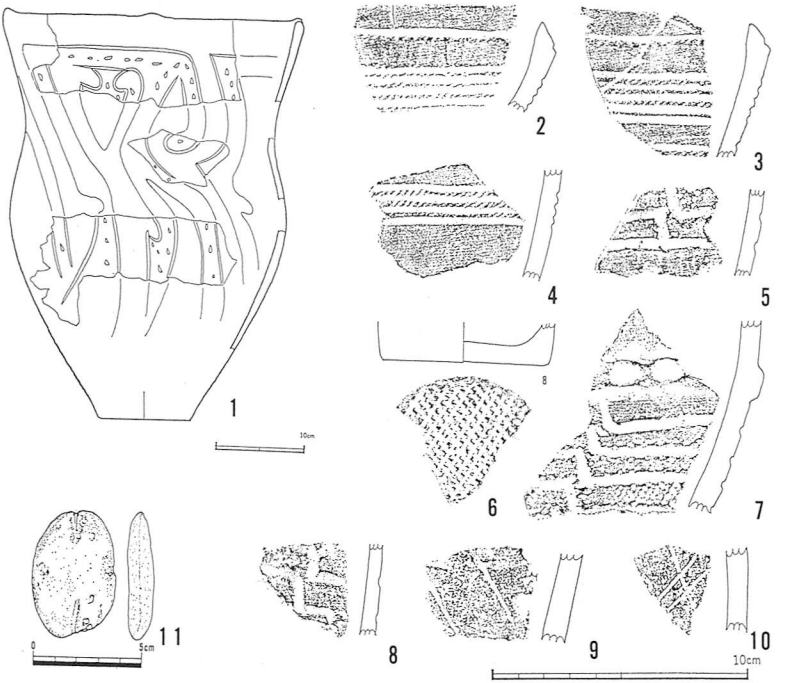
いずれにしても、厳しい生活条件の中で、人人の呪術への関心は一層の高まりをみせた。土偶、石棒、土版、仮面などの祭祀的遺物、大規模な配石遺構の存在などは、各種儀礼の盛行したことを示している。また、犬歯や門歯を抜去する抜歯の風習は、成人式など人生の通過儀礼に関係するものといわれ、晩期にかけて急速に拡大していく。

土器は沈線化するとともに、器面を磨き、縄文を磨り消した洗練された磨消縄文手法が発達する。後期初頭の称名寺式では曲線的磨消縄文や沈線文が、ついで堀之内式では沈線文が発達し、加曾利B式期には精製土器と粗製土器の分離が明確となり、機能に応じた土器生産が一般化する。加曾利B様式はきわめて斉一性の強い土器で、遠く北海道方面にまで同種の土器が見られる。後期末葉には帯縄文の安行式が盛行する。

多摩川流域の遺跡としては、青梅市寺改戸遺跡で加曾利B式期の土壙墓が発見され、注口土器の優品が出土した。昭島市龍津寺東遺跡は後期初頭から中葉に至る遺跡で、敷石住居址なども発見されている。この遺跡からは楕円形の小礫の両端に刻みを入れた、漁網用のおもりと考えられる石錘（せきすい）が多数出土し、後期になって多摩川での網漁法

図Ⅰ-29　縄文後期の土器

1，2．堀之内式（昭島市龍津寺東遺跡出土）　3．加曾利B式（青梅市寺改戸遺跡出土）



図Ⅰ-30　福生市1号遺跡と6号遺跡の縄文後期遺物
1. 福生市1号遺跡の称名寺Ⅱ式土器
2～10. 福生市6号遺跡の加曾利B式土器　11. 石錘

が盛んになったことを裏付けている。多摩川と浅川に挟まれた日野市南広間地（みなみひろまち）遺跡も後期の集落遺跡である。また、秋川市前田耕地遺跡は後期初頭の、同中高瀬遺跡は後期後半の遺跡として知られている。しかし、中期に栄えた集落の大部分は、中期末葉で集落としての機能を失い消滅していった。長沢遺跡もまた、ほかの中期集落と同様の足跡をたどった。

1号遺跡と6号遺跡　福生市の縄文後期遺跡は、長沢遺跡での断片的土器片と1号遺跡・6号遺跡があるが、いずれも小規模なものである。

1号遺跡は羽村市との境に位置し、拝島段丘上を占める。昭和五七年に試掘調査を実施し、後期初頭の土器片を採集した。その内一つは数十片の同一個体で、図Ⅰ-30

は図上復元したものである。口縁が外反し、胴部のくびれた深鉢で、沈線による曲線的文様にへらによる刺突文をともなっている。この土器は後期初頭の称名寺Ⅱ式と呼ばれるもので、多摩川中流域では比較的珍しい存在である。ほかに、もう一点の後期初頭土器片と、打製石斧二点、礫器一点が発見された。1号遺跡は縄文後期初頭の活動の痕跡を止めるが、土器の在り方などから集落遺跡とは考え難く、一時的活動の場とみられる。

6号遺跡は牛浜駅の西約〇・五キロメートル、標高一二三メートル、多摩川沖積面との比高差一一メートルの段丘縁辺にある。昭和四五年C・T・キーリによって発見され、その後主たる遺物散布域にアパートが建設され、遺跡の大半は破壊されてしまった。昭和六一年、わずかに残された部分に対し、市史編纂事業の一環として試掘調査を実施した。その結果、清水晃宅庭先に設定した、幅一・五メートル、長さ一六メートルの試掘溝から、縄文後期加曾利B式を主体とする土器片七二点と石器一点を発見した。この地点は表土が浅く、遺物は現地表下一五～三〇センチメートルの茶褐色土層から発見された。

図Ⅰ-30 2～10は試掘調査で発見された土器で、いずれも縄文後期に属する。器形は深鉢形または鉢形で、厚さ七ミリ前後と薄手、器面はよく磨かれたものが多い。文様は密接した平行線間に細かい刻み目を施したもの、口縁に紐状の貼付文、その下に細かい縄文を地文に「L」字状沈線文を数条平行させたものなど、加曾利BⅠ式に典型的なものである。また斜沈線を交差させる文様も、加曾利BⅠ式期に本地域で多くみられる。ほかに、無文の土器や沈線文の堀之内式土器なども認められる。また、底部に網代痕のみられるものがあることは、当時アンペラ状の編み物が使われていたことを示している。これは遺物としては現存しなくても、籠なども製作・使用されていたことを推測させる。

石器は打製石斧と石錘がある。石錘は長さ約六センチメートル、楕円形の扁平な礫に両端から刻みを入れて糸かけ

としたもので、漁網用のおもりと考えられる。

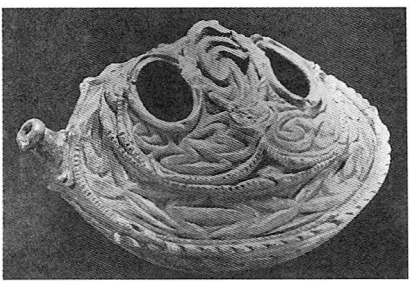
以上、6号遺跡は縄文後期加曾利BI式期を中心とした集落遺跡で、多摩川流域での遺跡が急速に減少した時期の数少ない一つとして貴重である。

6　縄文晩期

縄文文化最後の華　後期以来の遺跡数減少はさらに進み、縄文社会の衰退は、行き詰まりの情況を思わせる。そして、やがて西日本には稲作が導入され、新来の弥生文化にとって代るが、東北地方では亀ヶ岡式文化が繁栄し、縄文文化最後の華を開く。

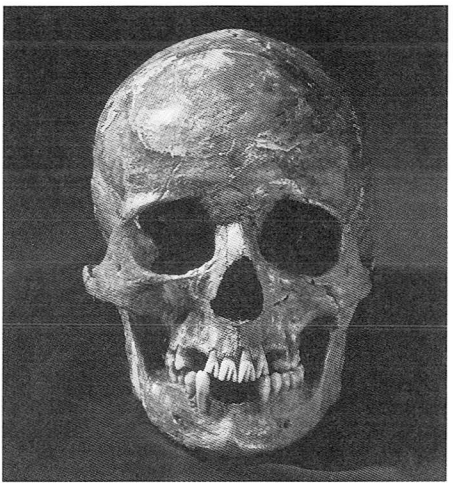
土器は関東地方では前半に安行式の入組文が、後半には工字状文が発達する。また、亀ヶ岡式土器の影響も広くおよび、華麗な文様で飾られた壺、甕、鉢のほか香炉形土器など特殊なもの、朱や漆の塗られた優品も多く残されている。

遺跡数の激減とともに、集落の規模も縮小し、数軒を単位とする住居址が縄文後期の大貝塚の一角に発見され、細々と命脈を保っていた様相を看取することができる。晩期遺跡で特に注目されるのは、呪術的色彩の濃いことである。愛知県吉胡貝塚や同稲荷山貝塚などの人骨には大部分に抜歯の痕跡があり、同伊川津貝塚の抜歯と叉状研歯をもつ異様な人物は呪術師であろう。土偶や土製仮面、各種装身具などにも呪術的儀礼の存在をうかがうことができる。



図Ⅰ-31　縄文晩期の土器

図Ⅰ-33　鹿角製装身具
青森県亀ケ岡遺跡出土



図Ⅰ-32　抜歯と叉状研歯のある呪者
愛知県伊川津貝塚『日本の美術』191より

多摩地域での晩期遺跡は非常に少なく、福生市域からはまだ見つかっていない。青梅市駒木野の喜代沢遺跡は後期から晩期にかけての集落で、土器のほか多数の石鏃・石錘が発見されている。昭島市坂上遺跡は未調査ながら晩期土器が採集されており、日野市南広間地遺跡からは焼骨（シカ・イノシシ類）をともなった住居址や土器・石器のほか、祭祀に使用されたと思われる亀形土製品が発見されている。秋川・平井川流域では、都立五日市高校遺跡や秋川市中高瀬遺跡が知られている。晩期遺跡の特徴は石鏃やチャートの剝片が多いことで、狩猟活動が盛んであったことを推測させる。なお、多摩地域の晩期遺跡は大部分が前半に属するもので、晩期後半の遺跡はほとんど知られていない。

第三節　長沢遺跡に見る縄文人の社会と生活

1　長沢遺跡の位置と調査

広大な遺跡

長沢遺跡は福生駅北西約三〇〇メートルを中心に、北は福生消防署北、南は福生市立第一小学校、西は神明社、東は青梅線に囲まれた広範囲におよび、面積は約五万平方メートルである。遺跡地の標高一三〇メートル、拝島段丘の縁辺に位置し、一段下位の天ケ瀬段丘面との比高差六メートルを測る。段丘崖にはかつて豊富な湧水がみられ、縄文人に格好の生活環境を与えていたと思われる。遺跡のある拝島段丘上にはローム層はなく、黒褐色土層下には厚く砂礫層が堆積している。

長沢遺跡は昭和四二年刊行の『西多摩文化財総合調査報告』に記載されており、市内ではもっとも早くから注目されていた遺跡である。これまで八回の学術調査が実施されたが、遺跡地がすでに市街化しているため、広範囲にわたる調査は不可能で、開発にともなう小規模な調査に止まっている。

調査の経過

長沢遺跡は昭和四五年以来八次にわたる調査がおこなわれている。調査の経緯と成果について簡単に紹介しておこう。

○第一次調査　昭和四五年、福生消防署建設の事前調査として実施された。調査面積は約五〇〇平方メートル、塩野半十郎を主任調査員とし、現地調査は約半月で終了した。発見された遺構は、報告書では竪穴住居三軒となっている

が、その後の検討で加曾利E式期の住居址七軒が複合して存在したと推定されている。この調査では多量の土器と二八〇点の石器も出土した。

○第二次調査　昭和四六年、都道拡幅工事に際し、塩野半十郎・川崎義雄らによって実施された。対象面積は約一四〇〇平方メートルであったが、実際に発掘したのは約半分であった。この調査では竪穴住居址三軒と十数基の土壙墓、南端からは時期・性格不明ながら大規模な敷石遺構が発見された。遺物は大量の土器と約一〇〇〇点におよぶ石器類が発見された。なお、第3号住居址覆土から、勝坂式期の人面付土器が発見された。

○第三次調査　昭和五二年、福生消防署東に地域会館（扶桑会館）建設の事前調査で、和田哲を団長として実施された。対象面積は約六〇〇平方メートルで、全面発掘するとともに、遺物は一点ずつ記録して取り上げた。遺構は縄文中期初頭五領ヶ台式期の炉穴一基のほか、土坑三基、埋甕一基、集石遺構などが検出された。また、調査中に東側道路の舗装改良工事がおこなわれ、三地点に試掘溝を設置したところ、その一つから住居址の一部を発見した。この調査では消防署寄りの地点からは遺構が検出されず、遺物分布もまばらであることから、集落中央の広場的存在が明らかとなり、長沢遺跡を環状集落と推定する根拠となっている。

○第四次調査　昭和五五年から五六年にかけて実施された。福生市立第一小学校の体育館建て替えにともなう調査で、対象面積約八〇〇平方メートル内に、二メートル×四メートルの試掘溝を市松状に設定して調査したが、土坑一基を発見したのみであった。遺物もきわめて少量であったが、一地点から縄文前期の繊維土器がまとまって出土した。

○第五次調査　昭和五六年、福生市立第一小学校の特別教室建設の事前調査である。対象面積約四〇〇平方メートル中、半分を発掘した。その結果、土坑一基のほか、時期・性格不明の敷石遺構が発見された。遺物は少なく、わずか

図Ⅰ-34　長沢遺跡の範囲と調査地点

な勝坂式土器片を得たのみであった。

○第六次調査　昭和五七年、遺跡東北部に共同住宅が建設されることになり、事前調査を実施した。調査面積約三〇〇平方メートルで、竪穴住居址一軒のほか、五基の集石土坑が発見された。遺物は土器・石器が多量に出土したが、礫層上面に礫と混在する状態で発見された。この調査では非常にリアルに表現された蛇体把手が出土し、縄文人の精神生活を知るうえで注目される。

○第七次調査　昭和五八年、福生市立第一小学校の校庭改良工事にともなって実施された。調査は夏休み中に工事を終了しなければならないという厳しい条件の中で、校庭に縦横に長いトレンチを設定して実施した。その結果、竪穴住居址一軒が発見された。覆土内から土器・石器が多く発見されたが、トレンチ内からの遺物はきわめて少なかった。また、一地点から縄文前期諸磯b式土器の同一個体一〇片が出土した。

○第八次調査　平成三年、福生保育園の建て替え工事にともなう事前調査とし、和田哲を団長として実施された。対象面積は約一〇〇〇平方メートル。遺構としては竪穴住居址一五軒、集石遺構五基、時期・性格不明の敷石遺構などが発見された。遺物は土器・石器多数を出土したが、住居址や周辺に散在する土器はすべて勝坂式で、加曾利E式土器はほとんど見られない。こうしたあり方は、長沢遺跡の集落展開を考える上できわめて重要である。

2　住居と生活用具

竪穴住居と家族

長沢遺跡からはこれまでの調査で二八軒の竪穴住居址が発見されている。住居址が最も密集したのは第一次調査の福生消防署付近であったが、同じ場所に何度も住居の建て替えが行われたため、住居址

図Ⅰ-35　長沢遺跡第七次調査の竪穴住居址

が複合していて、構造を十分把握することができない。そこで、ここでは第七次調査で、福生市立第一小学校々庭から発見された竪穴住居址を例にとって、構造を説明しよう。

竪穴住居は校庭の深さ四〇センチメートルの所から発見された。規模は四・八メートル×四メートルの楕円形平面で、さらに二〇～二五センチメートル掘り込まれていた。したがって、現在の地表面から竪穴の床面までの深さは約六〇センチメートルを測る。床面は中央でやや低くなるがほぼ平坦で、中央より幾分北に寄って土器を埋設した炉がつくられていた。また、竪穴内の壁際には四本の柱穴が発見された。柱穴は直径三〇センチメートル前後の円形で、深さ三〇～五〇センチメートルに掘られ、穴は礫層を掘り込んでいた。

炉は土器の下半部を打ち欠いたものが、住居中央よりやや北に寄って埋設されていた。これは住居南側に出入口を設けたための配慮と思われ、多摩川流域の住居には一般的にみられるものである。炉は一家団欒の中心で、煮炊きし、

図Ⅰ-36　長沢遺跡第一次調査の石囲い埋甕炉

暖をとって寒さをしのぎ、夜は灯火の役割も果したであろう。炉は勝坂式期の土器を埋設した埋甕炉のほか、加曾利E式初頭の石囲い埋甕炉、その後は石囲い炉へと時期的変化がみられる。住居内には間仕切りのようなものは認められないが、炉を中心に家族成員それぞれの空間（座）が決められていたものと思われる。

この住居址の床面積は約一六平方メートルで、当時の住居としてはやや小形であるが、五人前後が生活することは可能であったろう。千葉県市川市姥山貝塚からは、ほぼ同規模の住居址が発見され、住居址内から何らかの原因で事故死したと思われる家族五人の人骨が発見されている。

竪穴住居は最近各地に復元住居がみられる。掘り上げた土は周囲に土手状に積み上げられ、円錐形の上屋を土手上に葺き下ろすことによって、雨水の浸入を防ぐことができたものと考えられる。建築用材にはクリが多用されたようで、羽村市山根坂上遺跡をはじめ、各地でクリの炭化材が検出されている。屋根はカヤ葺き、柱や梁などの結束にはフジづるなども使用されたものと推測される。

失われた財産目録　長沢遺跡から発掘されたものは、永年土中にあっても腐らなかった土器や石器類である。土器内には種々の内容物が含まれていたであろうし、石斧も使用するためには木質の柄なども必要であった。しかし、酸性土壌では有機質のものの残存は望めない。ただ、泥炭層のような酸素の供給が断たれた遺跡では、例外的

に有機物の残存する場合がある。

縄文時代の泥炭層遺跡として著名な福井県三方湖の南にある鳥浜貝塚は、〝縄文のタイム・カプセル〟と呼ばれ、数多くの有機質、植物性遺物を残している。鳥浜貝塚の木製品には多量の石斧の柄があるが、ユズリハ・サカキ・ヤブツバキといった弾力性に富む素材が選ばれている。また、弓にはカシ類、丸木舟にはスギ、櫂にはケヤキ・ヤマグワが用いられ、縄文人が木の性質を熟知し、目的に適った木材を選択利用していたことがわかる。ほかに、木製の容器、各種の板材、杭、柱、棒といった木製品多数があり、縄文文化は一面では木の文化ということができる。

さらに驚くべきことは、木製の鉢や盆に赤色漆・黒漆の塗られたものの多いことで、すでに縄文前期には漆器製作技術が確立していたことを示している。漆は、ときに祭祀用と思われる土器にも、美しい文様を描いて施されることもある。植物質遺物として、ほかに編み籠、編み布、紐、縄なども豊富にあり、長沢縄文人の失われた財産目録の一部を垣間見ることができる。長沢縄文人も土器・石器以外にこうした生活用具を目的に応じて使い分け、日々の生活を営んでいたと思われる。こうした成果を参考に、残された遺物から長沢縄文人の生活を考えてみたいと思う。

図Ⅰ-37　復元住居（多摩ニュータウン遺跡）

煮炊き用の深鉢形土器

長沢遺跡から出土する遺物は土器がもっとも多い。土器の発明は人類の生活を飛躍的に向上させた。土器は軟らかい粘土を焼くことによって、硬質の容器に変え、煮炊きや貯蔵といった機能をもたせることになった。中でも、煮炊きによって植物質の堅いものを軟らかくし、食物の

図Ⅰ-38　長沢遺跡の各種縄文土器

範囲を拡げたことは画期的であった。発生期の縄文土器が、底が丸く尖った形態をしているのは、熱効率がよく、煮炊きにかなった器形であった。一方、土器の中には籠を模したかと思われる形のものもあり、新潟県室谷洞穴の草創期土器にすでにみられる。縄文土器は当初から煮炊き、貯蔵の両機能を基本に製作されたのであろう。しかし、時期的推移の中で、縄文社会の発展は、生活目的に応じた新たな器形を生み、日常的な器とハレの器などの別も生じ、多様な器形を生み出していった。

長沢遺跡の土器は深鉢形を呈するものが圧倒的に多く、それに鉢や浅鉢、有孔鍔付土器といった特殊な器形が加わっている。深鉢形土器は高さ三〇センチメートル前後のものが多いが、中には口径四三センチメートル、高さ五八センチメートルにおよぶ大形のものもみられる。こうした超大形の土器は貯蔵具としての用途が考えられるが、深鉢形土器の大部分は煮炊きに用いられた。その証拠に、胴下部には二次的被熱による赤化がみられたり、口縁部には煮えこぼれによるスス状の炭化物の付着が認められる。深鉢形土器の中には、円筒形をした単純なもののほか、中期後半の加曾利E式土器では口縁を大きくふくらませた器形が流行する。

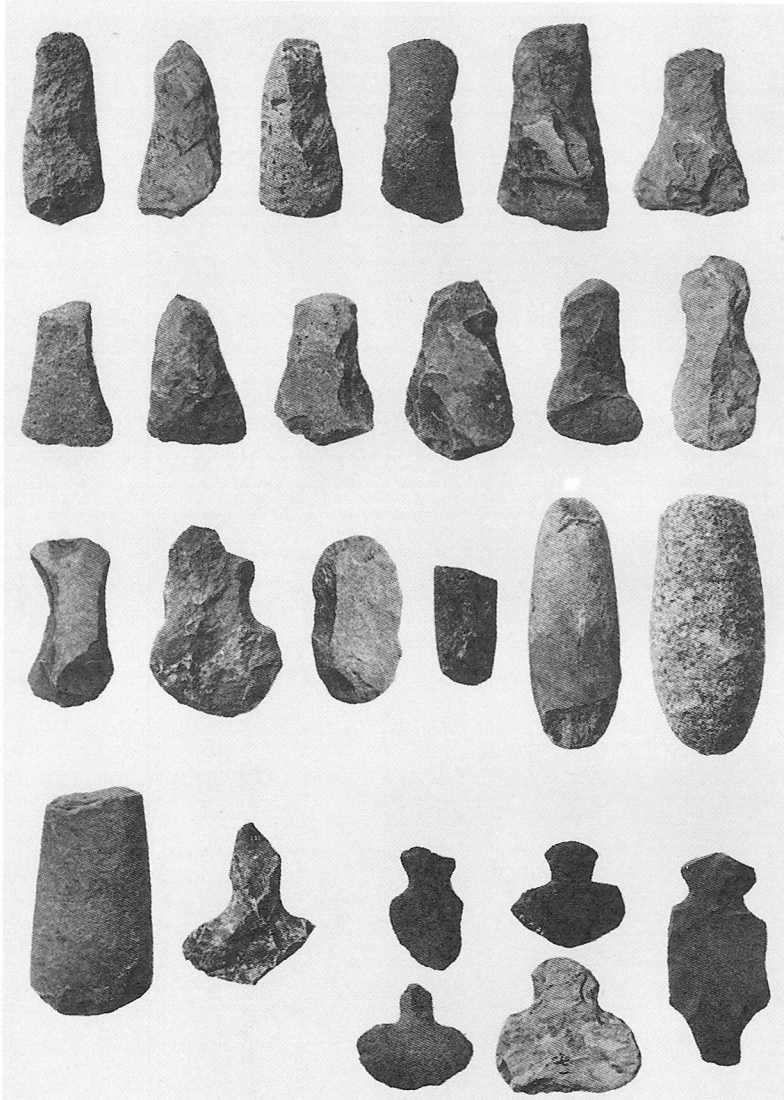
浅鉢形土器は比較的大形のものが多い。図Ⅰ-38下は口径四二センチメートルを測り、土器の外面は無文でよく磨かれているが、内面に円形状・雲形状の文様が朱塗りで描かれた痕跡がみられる。浅鉢には朱塗りのものが多く、日常的な容器とは別に、祭祀儀礼にかかわる供献具としての性格をもったものと考えられる。ほかには、たらいを伏せたような器台形土器、脚部のある台付土器、有孔鍔付土器など特殊なものもあり、長沢縄文人は目的に合わせてこれらの土器を使い分けていたことがわかる。

長沢遺跡の縄文土器も、縄目文様、粘土紐の貼り付け文、刻み目文、へらによる沈線文など様々な文様で飾られて

いる。ときには人面やマムシと思われる蛇体を表現したものもある。こうした複雑な土器の文様が単なる装飾ではなく、縄文人の精神世界を表現したものであるとする意見もある。土器文様の中には、我々の理解し得ない縄文人の神話や世界観を示す物語が秘められているのかも知れない。こうした方面の研究はまだ緒についたばかりである。

ところで、縄文土器の製作は、粘土を採取して砂を混ぜてよく練り、しばらく土をねかせてから、粘土の帯を積み上げて形をつくる輪積み法が用いられた。形が整ったところで文様をつけ、陰干しした後に野焼きされて完成した。マードックの研究によると、世界の一〇六部族の調査で、女性のみが土器づくりをするもの七七、女性が中心のもの八、男性のみのもの一三、男性が中心のもの二、男女平等の土器づくりが六部族という結果である。すなわち、約八二パーセントは女性、一八パーセントが男性中心の土器づくりということになり、圧倒的に女性の仕事とされている。こうした事例からすると、縄文土器も女性の手になった可能性が高い。不思議なことに、土器製作はロクロを使用する段階になると男性の仕事へと変化していく例が多い。

さまざまな用途の石器類　長沢遺跡から発見される石器は、狩猟具としての石鏃、土掘り具としての圧倒的量の打製石斧、斧としての機能を有する磨製石斧、製粉具の石皿と磨石、ナイフ様の用途が考えられる石匙などがある。石鏃は黒曜石またはチャートなどのガラス質の石を加工し、三角形をした無茎鏃である。石鏃は矢柄の先端に装着されて、弓で射られたもので、遺物としては残らなかった木製の弓や、篠竹の矢柄の存在を推測させる。縄文時代の弓は鳥浜貝塚や岩手県萢内(しだない)遺跡などに発見例があり、一メートル弱の短弓と一・五メートルを超える長弓の存在が知られている。素材にはカヤ、イヌガヤ、イチイなど弾力性に富むものが用いられ、石鏃と矢柄との膠着剤(こうちゃくざい)にはウルシやアスファルトの使用されたものもある。小さな石鏃にはトリカブトの毒などが塗られ、殺傷力を強めていたことで



図Ⅰ-39　長沢遺跡の石器
上2段と3段目左3点は打製石斧．3段目右3点と4段目左端は磨製石斧．
最下段6点は石匙

あろう。狩りにはすでに猟犬が用いられ、獲物の追い出しや追跡に活躍した。縄文犬は柴犬程度の小型犬で、死んだ犬を丁重に埋葬した例からも知られるように、家族同様に可愛がられていたであろう。

狩猟には、ほかに落し穴も用いられた。山の斜面などのケモノ道に、長さ一～二メートルの楕円形の穴を掘り、その中に獲物を追い落とすもので、縄文早期からおこなわれた狩猟法である。

石器の中でもっとも多いのが打製石斧である。多摩川流域の中期遺跡には特に多く、全出土石器の約八五パーセントを占め、圧倒的な量を誇る。この石器は平面形から短冊型、撥型、分銅型に分類されているが、中期のものは大部分が短冊型と撥型で、分銅型は後期に多くなる。石斧という名称が付されているが、実際に斧としての機能を有するものではなく、土掘り、土掻き具である。打製石斧の側縁には柄を着装したときのつぶれがみられるものもあり、使用方法を推測させる。打製石斧の素材は、砂岩や頁岩といった、多摩川の河原にいくらでもみられるものである。しかし、多量の打製石斧が存在するにもかかわらず、遺跡内に加工の際に生ずる石屑が少ないので、製造の場は集落以外の地、即ち、原石の入手しやすい河川敷などにあったことも考えられる。

磨製石斧は量的には少ないが、凝灰岩や蛇紋岩を素材とし、蛤状の刃部をつくり、丸い断面の軸部をもつ乳棒状石斧と呼ばれるものである。この石器は樹木の伐採や加工に威力を発揮した。磨製石斧は柄の着け方によって、鉞様のものと手斧様のものがある。鳥浜貝塚では石斧の柄が多数出土したが、サカキ、ユズリハ、ヤブツバキなどの弾力性ある樹種を選び、幹の部分に石斧を装着し、枝の部分を柄として利用していることが判明した。縄文人は経験的に木材の性質を熟知し、適材を使用していたことが証明された。

石皿と呼ばれるのは、平たい自然石の中央が皿状に窪んだもので、磨り臼としての機能をもつものである。磨石と

呼ばれる石鹸状の手に握れる楕円形礫とセットで使用され、木ノ実などを磨り潰して製粉するための道具である。秋に拾うドングリなどを製粉し、長沢の段丘崖から湧き出る清水で晒してアクを抜き、パンや餅状に加工して食料とするために使われたのであろう。なお、磨石の中央に小さな窪みをもつものがあり、凹石の名称が付されている。これは発火用具の火きり杵の上のおさえ石、またはクルミ割りに使用されたなどの説がある。

そのほか、石匙と呼ばれる上端につまみの付いた石器がある。横長と縦長の刃部をもつものがあり、横型石匙・縦型石匙の名称が付けられている。長沢遺跡からは両者が出土し、石材は頁岩、チャートのほか砂岩なども用いられている。この石器はつまみの部分に紐をつけて携帯し、ナイフとして利用されたとし、皮剝ぎと呼ばれることもある。しかし、ナイフとしての機能には疑問視する向きもあり、柄をつけて草かき用とし、多量の打製石斧とともに原始的農耕と関連する石器とする意見もある。長沢遺跡第三次調査の3号土坑では、大型の石匙が坑底面から発見されている。類例は八王子市神谷原遺跡にあり、集落中央の墓壙群中、一〇基の土坑内から石匙が検出されている。しかも、いずれも土坑底面に接して出土し、副葬したとするよりは石匙を着装していた人物が埋葬されたとみることができる。

3　生業と交易

長沢の四季と食料獲得

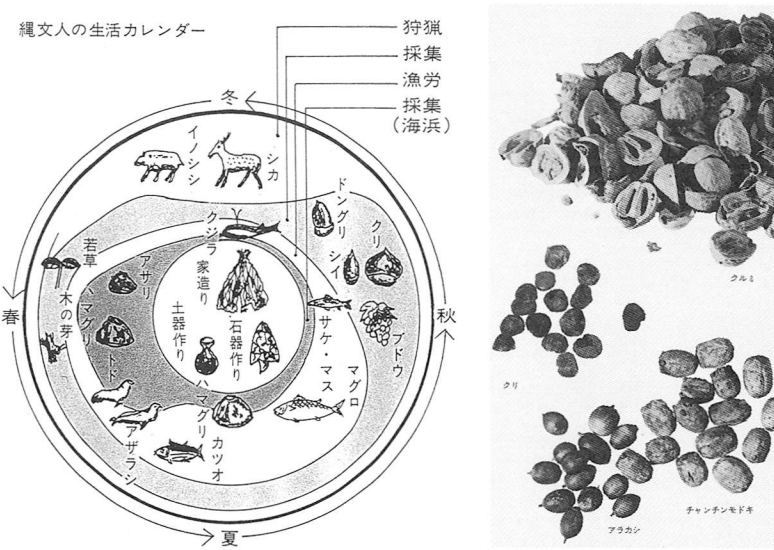
長沢に縄文人が暮らしていた頃、気候的には現在とほぼ同じであったが、中期末にやや寒冷化した。第三次調査では、当時の古環境を明らかにする目的で、土壌の花粉分析をおこなった。その結果、縄文期の長沢遺跡周辺はヨモギ属、スゲ科、イネ科の草本類が卓越し、クリ属、クリカシ属とトチノキ属の樹木類が若干見られる景観と推定された。これは雑木林を切り開いて集落を営んだ結果、草本類が優占し、伐採後の二次林とし

てクリなどが多生する周辺の環境が形成されていたことを物語っている。

長沢縄文人の生活は狩猟・採集を基本としたであろう。狩猟対象動物はシカ・イノシシといった獣類が中心であったことは、各地に残る貝塚遺跡などの動物遺存体からも知られる。また、隣接する羽村市精進バケ遺跡からはシカ・イノシシ類と推定される焼骨の小片多数が発見されたことも傍証となろう。ほかに、ノウサギ・タヌキ・テン・アナグマなども捕獲されたと推定されるが、縄文時代の狩猟に占めるシカ・イノシシの量は多く、狩猟獣の九割を占めている。鳥類ではキジなどは格好の対象であったと思われ、精進バケ遺跡からはキジと推定される焼骨も検出された。狩猟は冬期を中心とした男の仕事である。野山を駆け巡り、動物の習性を熟知し、弓矢の技術に長けた一人前のハンターになるには長年の経験を必要とする。その上、獲物はそう簡単に入手できるものではない。いくつかの推計によると、恵まれた条件の中でも、一人のハンターが捕獲できるシカ・イノシシは、年間でせいぜい数頭と考えられている。それだけに狩りの獲物は貴重であるが、とても主食たり得る量ではないことが指摘されている。

長沢縄文人の日常生活を支えたのはむしろ、木ノ実や根茎類をはじめとする植物質食料であったろう。集落の背後に繁る広大な雑木林は、彼らにこの上ない豊かな恵みを与えてくれたであろう。春には各種の山菜が芽を出し、秋にはアケビやヤマブドウの漿果類、クリ、クルミ、ドングリ、トチなどの堅果類が豊富に実をつける。そのほか、クズ、ワラビ、ヤマイモ、ユリ根などの根茎類の採取もおこなわれたことと思われる。いずれにしても、縄文人は季節の変化の中で、自然のリズムに合わせ、自然と一体となった生活を送っていた。

こうした木ノ実を拾う仕事は女性や子供にもできる。部落総出で拾い集めた木ノ実は、加工・貯蔵され、年間を通じて重要な保存食料となったことであろう。長野県曾利遺跡（縄文中期）のコッペパン状炭化物、山形県押出遺跡



図Ⅰ-40　縄文人の生活カレンダー（左）と堅果類（右）小林達雄による

（縄文前期）のクッキー状炭化物は、縄文人の食料の一端を示して興味深い。押出遺跡のクッキー状炭化物は大きさ三～六センチメートルの円形で、中野益男によるとクリ、クルミの澱粉とシカ、イノシシの肉、野鳥の卵などを素材に、塩を加えて焼いたもので、保存食として優れたものであるとともに、栄養価も高いものといわれている。長沢縄文人も、こうした植物質食料に依存していたことが推定される。岐阜県の山村では、明治時代まで、トチやドングリ類がアワ、ヒエの雑穀とともに、村人の生活を支える貴重な食料資源であったことが報告されている。近年の植林された実りの少ない針葉樹林と異り、温帯の落葉広葉樹林の恵みは実に豊かで、種々の鳥や動物たちを養うとともに人間にも大きな恩恵を与えていた。

一方、多摩川での漁撈活動については明らかでないが、骨角製の利器を用いての釣りやヤスによる刺突のほか、筌（うけ）や石積みなど各種の漁法がおこなわれていたと思われる。コイ・ハヤ・アユなどは植物質食料をおぎなう貴重な蛋白源であっ

たろう。

豊かな採集民の生活　縄文時代のイメージは、かつては飢餓に苦しむ貧困で野蛮な時代とする考え方が支配的であった。これは縄文文化にかぎらず、世界の石器時代に関する一般的認識でもあった。しかし、最近の未開社会での生活実態に関する各種の調査結果は、従来のイメージを一新する意外と恵まれた生活環境を立証した。

例えば、アフリカやオーストラリア原住民の研究を通じて、狩猟・採集段階の生活を送る部族では、食料獲得のための一日の労働時間は約二時間であるのに対し、農業生産段階では雑草取りや各種農作業に費す時間は、一日平均四時間とされている。現代社会の労働時間と較べてみると、いかに時間的ゆとりがあるか知ることができる。豊かさの指標をどこに求めるか、価値観の問題にもかかわるが、或る面で狩猟・採集経済段階社会の豊かな生活をみてとることができる。

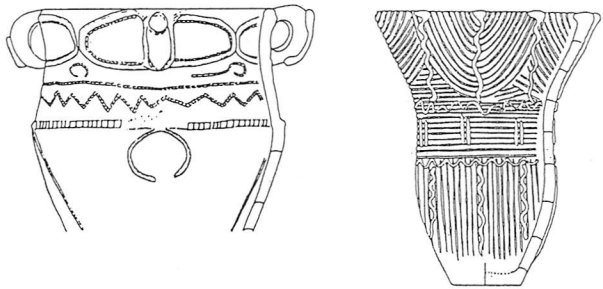
先に、縄文人の食料については植物質食料を主体としたものを想定したが、これも縄文人にかぎらず狩猟・採集民の一般的特徴といえる。例えば、アフリカのブッシュマンは一日一人当たりの熱量摂取は二一四〇キロカロリーで、内訳は肉類三三パーセント、モンゴンゴの実五九パーセント、そのほかの植物八パーセントで、狩猟民の典型とされる人たちでさえ食料の三分の二を植物質のものに依存していることが明らかになった。赤沢威らの千葉県古作貝塚の二〇体の縄文人骨に対する、組織蛋白質の中のアイソトープ比率測定による研究では、熱量の八〇パーセントがドングリやクルミ、ヤマイモ類、九パーセントが草食動物の肉類、一一パーセントが魚介類に依存したと推計している。

縄文人の生活は定住性が高く、ドングリを主食とする北米西海岸のカリフォルニア・インディアンの食生活と類似する点が多いといわれている。ブッシュマンの生活環境と比較して、はるかに恵まれた資源環境にあった縄文人は、

植物質食料を主体に想像以上に安定した食料事情にあったことが考えられる。

運ばれる黒曜石や土器

縄文人は広範囲にわたって交易していたことが、黒曜石や翡翠（ひすい）の分布などから判明している。長沢遺跡からも黒曜石製の石鏃が発見され、また黒曜石の砕片が見つかることもある。これは長沢縄文人が、ここで黒曜石を加工し、利器として使用していたことを示している。黒曜石の原石は産出地がかぎられており、関東近辺では長野県八ケ岳山麓の和田峠、箱根山系、伊豆諸島の神津島などである。黒曜石は科学的方法で産地同定が進んでいる。長沢遺跡の黒曜石がどこからもたらされたかは不明であるが、和田峠産の可能性が高い。黒曜石の原石は産出地から、途中のムラムラを仲介して将来されたと思われるが、そのためには当然見返りとしての物々交換がなされたことであろう。縄文時代、すでに各地で特産物的なものが存在した。例えば、海浜地域での魚介類、秋田・新潟のアスファルト、姫川流域の翡翠、銚子近辺のコハクなどで、縄文人の交易品であった。



図Ⅰ-41　阿玉台式土器（左）と曾利式土器（右）

しかし、もっとも多く利用された交易品は土器である。これは土器そのものは勿論、内容物を含んでの交易とみてよいであろう。本地域を代表する縄文中期前半の勝坂式土器に対し、同時期に霞ケ浦を中心とした東部関東地域では、胎土に多量の雲母を混入した特徴的な阿玉台式土器が製作・使用された。長沢遺跡でも第二次調査2号住居址からは、阿玉台式の深鉢形土器が出土したほか、阿玉台式の破片も多

くみられる。こうした土器はその製法が伝播したとするよりは、これらの土器に東部関東方面の特産品を入れて運ばれてきたことも考えられる。また、中期後半の加曾利E式期には、中部地方を核心とする大量の曾利式土器が認められる。しかし、その量的な多さは、すべてを中部地方からの搬入品とみるわけにはいかない。むしろ、婚姻などを通じての人的交流が活発であり、土器づくりの様式を異にする集団からの流入者を考えるべきであろう。同型式土器の分布圏（土器文化圏）は通婚圏に関係するともいわれている。

また、神奈川県尾崎遺跡では、未製品を含めた大量の磨製石斧が発見され、生産遺跡とされている。多摩川流域の大量の打製石斧も、石材の乏しい東部関東地域との交易品に充てられた可能性が大きい。

4　呪術（じゅじゅつ）の世界

縄文人の人生儀礼　長沢縄文人の精神生活を示す遺構・遺物は、きわめてかぎられたものである。したがって、他遺跡例なども参考に、中期縄文人の心を探ってみたい。

縄文人の出生から死に至る間の通過儀礼には何があったであろうか。誕生に関連する遺物として、土偶が古くから注目されている。土でつくられた人形の土偶は、長沢遺跡からは第八次調査で数点が発見されている。土偶の機能については、古来、呪物説・玩具説・神像説・護符説などがあるが、安産祈願とそれに象徴される万物の豊穣といった祭式に用いられたとする考え方が有力である。大部分の土偶が女性であり、妊娠した姿を示したものの多いことは、出産と無関係ではあり得ない。土偶の大部分は毀れ、否、毀されて発見される。無事出産したことによって、土偶はその役割を果し、打ち棄てられたのであろうか。あるいは、母なる土偶を毀すことによって死を与え、新たな生命の

誕生を願う〝死と再生〟の呪術でもあったのだろうか、謎の多い遺物である。

縄文人にとっても、子供の誕生はこの上ない喜びだったと思われる。しかし、生まれた子の多くは夭逝した。数多くの古人骨を詳細に検討した小林和正によれば、縄文人の一五歳時の平均余命は男一六・一年、女一六・三年で、一五歳までの生存率四〇パーセントと推計されている。すなわち、縄文人は一五歳までに半数以上が死亡し、その後生存した人の寿命も男三一・一歳、女三一・三歳というきわめて短命な生涯となる。しかし、これでは人口が維持できないという指摘もあり、再吟味が必要であるが、大幅な変更はないであろう。ともかく、幼児死亡率は現代とは比較にならないほど高かったことは確実である。

縄文中期後半の竪穴住居では、出入口近くの床面下に土器を埋設した埋甕が多くみられる。埋甕の目的については幼児葬棺説、胞衣（胎盤）収納説などがある。幼児葬棺説は夭逝した小児を甕に入れ、母親がそれを踏みまたぐことによって、死んだ子供の霊が母の胎内に戻り、新たな生命をさずかる妊娠呪術であるという。胎盤収納説は民俗学的成果を援用したもので、日本では近年に至るまで出産時の胎盤を容器に入れ、家の戸口や道路の辻などに埋める風習があった。これを踏めば踏むほど子供が丈夫に育つといわれ、生まれた子の健やかな成長を願う呪術である。

成長した子供が、一人前の大人として認知されるとき、成人式がおこなわれた。健全な永久歯を抜去する抜歯の風習は、縄文中期末に関東・東北地方で発生し、後・晩期に西日本で盛行する。岡山県津雲貝塚や愛知県吉胡貝塚の人骨は大部分に抜歯がおこなわれている。しかも、そのほとんどが上顎犬歯に対しておこなわれていることから、成人式の儀礼にかかわるものと思われる。抜歯はほかに門歯や下顎の犬歯などにも施されており、これは結婚や葬送儀礼にともなうものもあるらしい。民俗例に徴しても、台湾では結婚する男女は互に歯を抜いて贈り合い、ハワイでは近

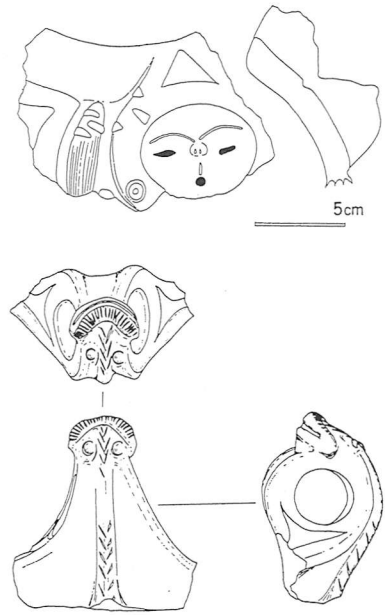
親者の死に際して抜歯をおこなって哀悼の意を表したといわれている。いずれにしても、未開社会では、厳しい環境の中で生き抜くために、それに相応しい試練が課され、これを通過したもののみが大人として遇されたのである。

成人した男女は結婚する。結婚は血族結婚を避けて、周辺の集落やときに遠方の集落との間でおこなわれたであろう。土器様式の地域的共通性＝土器文化圏は通婚圏を示すといわれる。縄文時代の社会組織を研究した大林太良によれば、縄文人の婚姻形態は夫方居住婚が支配的であったとしている。すなわち、女性が夫の家にとつぐ、夫系制社会である。また、夫方・妻方のどちらかを選ぶ選択居住婚も想定されるが、かつて主張されたような母系制社会は否定された。縄文社会での結婚は、勿論個人的次元の問題ではない。集落全体のかかわる大事で、結婚に関する儀礼は精一杯盛大に挙行されていたことであろう。

長沢遺跡からは、顔面付土器が発見されている。勝坂式末葉の土器で、人面部以外の破片は見当らないが、素朴ながら可愛らしい顔立ちをしている。こうした土器は日常的に使用されたものではない。恐らく結婚式などの非日常的ハレの場で用いられたものであろう。また、彩色された大きな浅鉢形土器なども、祝宴用の共食の器であったろう。

祭祀儀礼には歌舞、飲酒がつきものである。それに関連するものとして有孔鍔付土器という特殊な器がある。平坦な口縁下に小孔、その下に鍔状の凸帯がめぐる。胴部は人体文、動物文など特殊な文様で飾られ、ときに塗朱されたものもある。有孔鍔付土器は、長野県藤内遺跡で器内からヤマブドウの種子一粒が検出されたことから、果実酒などの醸造具と考えられ、上部の孔は発酵の際のガス抜き穴とされている。ところが、長沢遺跡では第二次調査の北端部から四個の有孔鍔付土器が発見され、内三個は孔が凸帯を上下に貫いて穿けられていた。こうした例は他遺跡にもあり、ガス抜きの機能はまったく果さない。有孔鍔付土器については、山内清男が民俗例などから太鼓説を主張してい

る。平坦な口縁に皮を張り、孔に木製の栓でとめれば立派な太鼓として機能する。また、未開社会の民俗例では、太鼓に生命（魂）を入れるため、木の実を数粒入れる例があると聞く。藤内遺跡のヤマブドウはこれではなかったろうか。長沢遺跡の例でみるかぎり、有孔鍔付土器は醸造具説より太鼓説の方が説得力がある。いずれにしても、長沢遺跡の有孔鍔付土器が集中した地点は、太鼓を打ち鳴らし、各種祭祀儀礼のおこなわれた場所ではなかったろうか。



図Ⅰ-42　顔面付土器と蛇体把手

勝坂式土器でもう一つ特徴的なのは蛇体装飾である。長沢遺跡からは、第六次調査で実にリアルに表現された蛇体把手が発見された。とぐろを巻くかのような大きな環状把手の先端に、鋭い目と大きな口をもつマムシが表現されている。体部は隆線に綾杉状の刻み目をもっている。縄文人にとって、マムシは一瞬にして命を奪う恐ろしい存在であった。その恐怖と超越した力に霊力を認め、神として崇め、土器に飾られたのであろう。勝坂式土器の中には、綾杉状の隆線をもつものが多くあり、この文様自身がすでに蛇体として認識されていた可能性がある。

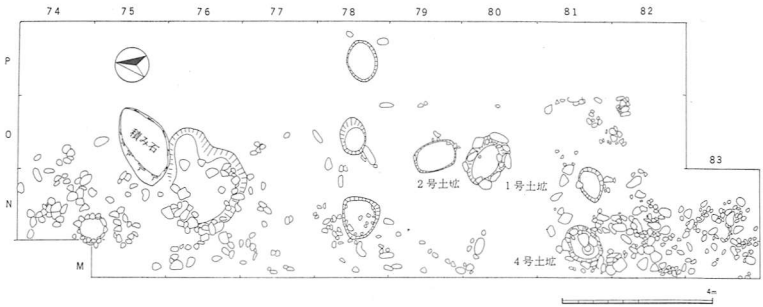
死と埋葬

縄文人は死に対してどのような観念をもっていたであろうか。縄文人の埋葬形態には、手足を折り曲げた窮屈な姿勢で葬る屈葬や、ときに胸に大きな石をのせた抱石葬などもあることから、死霊に対する恐怖心が強かったとする見方がある。しかし、人類はすでに旧石器時代から死者を丁重に埋葬している。イラクの

シャニダール洞窟では、ネアンデルタール人（旧人）に花を供えた例も報告されている。日本でも旧石器時代に属する北海道湯の里遺跡で、玉や垂飾をもち上面に赤色顔料の散布する土壙墓が発見されており、死者を丁重に扱っている様子を知ることができる。

酸性土壌の日本では遺体は残り難いが、貝塚は石灰質を形成しているために縄文人骨の腐蝕を防ぎ、多くの人骨を遺している。縄文人の墓は地面に穴を掘って埋める土壙墓が一般的である。埋葬は前述の屈葬と、手足を伸ばす伸展葬のほか、白骨化した遺体を土器などに入れて埋葬する再葬墓も広くみられる。縄文中期以降は一定地域に墓域を設けて、多くの墓壙をもつ集落全体の共同墓地が発展する。墓は集落内に営まれる場合と、集落から離れて独立的に存

図Ⅰ-43　西田遺跡（岩手県）の住居と墓域
『古代史復元』2より



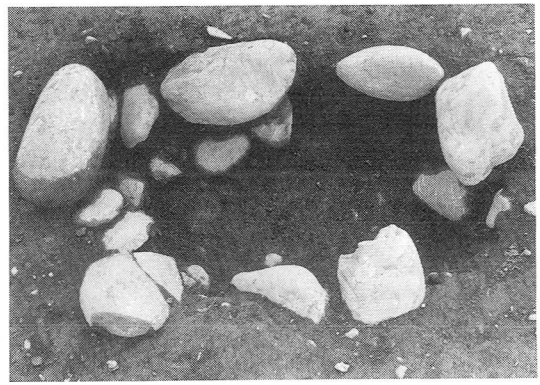
図Ⅰ-44　長沢遺跡の土壙墓分布

在する場合とがある。墓壙内からは、通常、死者が生前から身につけていた耳飾りや垂飾などの着装品は発見されることもあるが、顕著な副葬品は見当らない。墓は階級制を示す重要な指標であり、副葬品のない共同墓地への埋葬というあり方は、縄文時代が身分階級差のない社会であったことを想定させる。

縄文中期の墓地としては、多摩地域では八王子市神谷原遺跡で環状集落の中央に土壙墓群が、また、最近立川市向郷遺跡でも集落中央に直径三〇メートルの環状に二〇〇基を超える土壙墓が発見された。こうした例は、すでに岩手県西田遺跡に典型があり、中央に環状の土壙墓群、それを取り巻いて儀礼の場と推定される掘立柱建物群といった非日常的空間があり、その外側に竪穴住居群、さらにその外帯に貯蔵施設といった日常生活空間を配する、整然としたムラが発見されている。神谷原遺跡や向郷遺跡の場合も墓域を囲んで多数のピット（小穴）が発見されており、聖域を区画する柵状の施設なども想定される。

長沢遺跡の土壙墓群　長沢遺跡は環状集落と想定されているが、第二次調査では中央部に墓域と推定される十数基の土壙群が発見された。土壙は長径一メートル前後の楕円形プランを呈するものが多いが、いくつかのタイプが識別できるので説明しておこう。

（A型）第1号土壙を典型とし、土壙の周縁に大きな礫を配した周石墓である。



図Ⅰ-45　長沢遺跡の第1号土壙墓

第1号土壙は長径一・三メートル、短径〇・八メートルの長楕円形で、深さ五〇センチメートルを測る。土壙内に遺物は認められなかったが、黒土と礫が充満していた。縁石をもつ土壙はほかに二基認められた。

（B型）第6号土壙をはじめ数基あり、もっとも普遍的なものである。第6号土壙は長径一・五メートル、短径〇・九メートルの楕円形プランで、ごく一般的な土壙墓である。

（C型）埋設土器を有する土壙で、第2号・3号土壙がこのタイプに含まれる。第2号土壙は長径一・二メートル、短径〇・七メートルの長楕円形で、掘り込みは浅いが土壙上面が盛り上った状態にあったとされている。本土壙の特徴は、南東寄りに勝坂式の埋設土器が存在したことである。第3号土壙はやや大きく、長径二・〇五メートル、短径一・一メートルの長楕円形で、土壙中央のやや南寄りに加曾利E式の埋設土器が存在した。こうしたことから、C型の土壙墓が勝坂式期から加曾利E式期にかけて継続的におこなわれたことを知ることができる。

長沢遺跡では、ほかに第三次調査で三基、第四次・五次調査で各一基の土坑を発見しているが、はたして同じ性格を有するものかどうかは不明である。ただ、第三次調査3号土坑は、長径二・六メートル、短径一・一メートルと大形で、深さ九〇センチメートル、底面から粗大石匙を出土し、墓壙の可能性を示している。同様の例は八王子市神谷原遺跡の土壙群にある。

第二次調査で明らかなように、長沢縄文人は集落内に墓域を設定し、一定の規範をもって死者を埋葬していた。A型の周石墓は縄文後期に多くみられるが、中期段階のものとしては珍しい存在である。大礫を配することは墓標的役割も担ったであろうから、死者＝祖霊を敬う気持の表現と理解される。C型の埋設土器を有する土壙は八王子市神谷原遺跡にもあるが、長沢例とは細部で異っている。神谷原では完形土器や小形土器が多いのに対し、長沢例は胴下部を欠いた埋設土器で、炉体土器や埋甕と類似の用い方をしている。改葬などによる再葬墓と関係するかも知れないが、今後の検討を要する。

死者は墓壙内に埋葬されるとともに、その周辺で何らかの儀礼が執行されたと思われる。それを示すかのごとく、長沢遺跡で唯一の台付土器が墓壙群近くから発見されている。これは供献用の器であり、儀礼と深くかかわるものである。長沢縄文人は哀悼の念を込めて死者を手厚く葬り、墓域を中心に祖霊崇拝の儀礼をおこなっていたことが想定される。

5　長沢遺跡の変遷

第Ⅰ期（黎明期）　長沢遺跡に活動の痕跡を残した縄文人は、縄文前期から後期初頭におよんでいる。その間の集落の盛衰を大きく五期に分けてとらえることができる。

長沢遺跡のある段丘が形成されたのは完新世初頭の頃と思われる。当時の景観は丁度、今の多摩川の河原を思わせる状態であったろう。第三次調査の花粉分析によれば、ヨモギ属、タンポポ亜科、キク亜科、スゲ科の花粉が卓越し、草本類の繁茂する環境が想像される。そうしたところへ最初に足跡を残したのは縄文前期の人々であり、黒浜式や諸

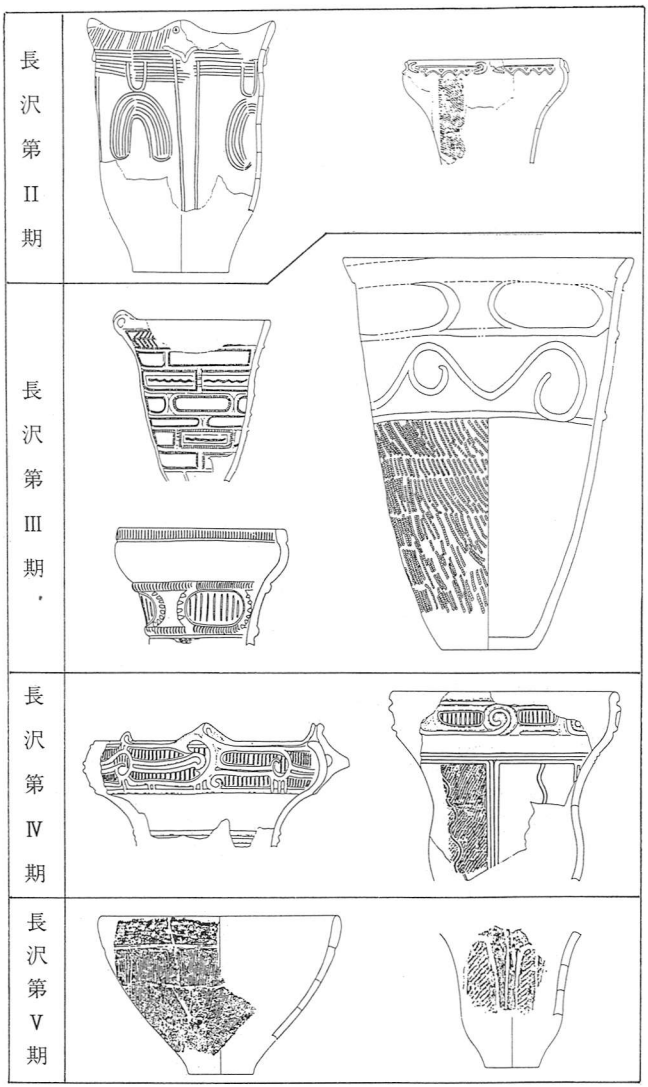
磯式土器が発見されている。しかし、遺構は発見されておらず、土器もきわめて少ないことから、定住的な様相はみられず、採集活動など一時的生活行動の一端が残されたものと推察される。

第Ⅱ期（成立期）　縄文中期初頭の五領ヶ台式末葉から、勝坂式初頭にかけての時期で、第三次調査地点の扶桑会館東側から、五領ヶ台式期の炉穴が発見された。五領ヶ台式土器はこの付近に多いため、住居址は未発見ながら、初めて縄文人の本格的な生活が、長沢の地で開始された時期である。この地点には五領ヶ台式から勝坂式への移行期の土器もあり、最初の集落がこの付近で形成されたものと思われる。しかし、その実態については今後の調査に待たねばならない。

第Ⅲ期（発展期）　勝坂式期で、集落が急速に発展していく。この時期の集落は遺跡の南縁部、市立第一小学校北側一帯を中心とし、市立保育園の建替えにともなって実施された第八次調査では、約一〇〇〇平方メートルの中から竪穴住居址一五軒、集石炉一八基などが発見された。そして、住居も複合していることから、同じ場所に何回か建替えられ、永続的に住居が営まれていたことを示している。勝坂式期の住居址は第一小学校校庭内を南限に、第二次調査3号住居址を北限とする約一〇〇メートル幅に集中している。竪穴には埋甕炉が多く、大量の土器と打製石斧が発見されている。中でも、第八次調査では蛇紋岩製の綺麗なペンダントや土偶なども出土し、第二次調査の3号住居址からは顔面把手付土器も出土した。集落規模の拡大とともに、生活文化の発展が顕著である。

第Ⅳ期（成熟期）　加曾利E式前葉の時期で、遺跡の北端部、第一次・二次調査地点を中心とする現福生消防署付近を核心に集落が形成された。住居群の場所の移動が、どのような要因によるかは不明であるが、第六次調査の勝坂式末葉の住居はすでに北へ移動している。

第一次調査では、少なくとも七軒以上の住居址が存在したと思われ、激しく重複している。これは、同一地点に何回か建て替えがおこなわれたことを示し、炉は石囲い埋甕炉が築かれ、土器・石器を多量に出土した。また、性格不明ながら配石状の部分も確認されている。



図Ⅰ-46　長沢遺跡の変遷と各期の土器

勝坂式期と加曾利E式期住居群の中間には墓域があり、第二次調査で土壙群が発見されている。土壙墓は発展期の勝坂式期から成熟期の加曾利E式前半の土器を含んでおり、居住地域が移動しても、墓域は一定している。これは、長沢縄文人が最初からこの地点を聖域として意識していた証明でもある。また、土器型式の連続性と相まって、聖域を共有するというあり方は、長沢遺跡が同一集団によって永続的に営まれたことを示している。

第Ⅴ期（衰退期）　加曾利E式期後半で、長沢遺跡は急激に集落規模を縮小していく。この時期の住居址は未発見であるが、土器は第三次調査の扶桑会館南端部に濃密な分布がみられた。恐らく、この付近に住居が存在したであろうが、その数は少なかったと思われる。加曾利E式期のこうした衰退は、長沢遺跡にかぎらず、羽村市精進バケ遺跡、同市山根坂上遺跡などにもみられ、本地域に共通した現象である。環境の変化など、何らかの要因で次第にこの地から人が減少していった姿を示している。そして、縄文後期に入ると、わずかに土器片が出土する程度で、長沢の地から人が姿を消し、集落としての機能を喪失し廃絶していった。